

心理学の国家資格者「公認心理師」の権能を展望する

立教大学 名誉教授・東京成徳短期大学 名誉教授

水口禮治 (みずぐち れいじ)

終戦直後の昭和20年代、荒廃していた国土は徐々に復興するも、教育の本質は未成熟で、「心理学」の社会的知名度はかなり低く、不人気な学問であった。ところが昭和30年代には景気回復が本格化し、「神武景気」→「岩戸景気」→「いざなぎ景気」などと、有史以前からの最高を誇る景気で賑わった。昭和40年代には、企業もこの景気に便乗して社員や大衆の心理を把握する委託調査に乗り出すようになった。例えば、当時、立教大学心理学科が企業から委託されて、私が処理した調査には次のような事例があった——「キーパンチャーの適性調査」、「喫煙行動の調査」、「勤労意欲調査」、「競輪・競馬・宝くじのファン行動」など。

昭和50年代に入ると、好景気に煽られて、多くの大学で心理学の「学科・学部・大学院」や関連施設等の充実が図られ、心理学専攻者の活躍の場も開発された。さらに関連学術団体も多く組織化され、それらの団体による「認定資格」も多く制定された。こうして平成に入り、リクルート社が全国の高校3年生の大学進学希望者を対象として行った調査では、「大学に入学したら最も学びたい専門科目」として、男女共に「心理学」を挙げたという。この時代から心理学はまさに「花形学問」として「存在感と知名度」を誇るに至ったのである。

いまや社会的にも、福祉・臨床・産業・医療・スポーツ等の多様な領域に於いても、心理学は不可欠な学問としてその効能が認知されるようになった。こうした進展に対応して、平成16年4月には日本の主要心理学会の83団体が「日本心理学諸学会連合会」を編成し、心理学の国家資格を目指して準備を進め、遂に平成30年9月に試験を行い、その結果を11月に発表し、初の国家資格「公認心理師」が誕生したのである。

ここで、私はこの機会に「公認心理師」には「医師と同等の権能」を与える措置を講ずるべきだと提言したい。何故なら、心理学は「心の科学」として体系化されており、福祉や臨床という医学の近接領域でも、その効能や役割を広く発揮しているからである。例えばアメリカでは、臨床心理士が処方のための訓練を受けるなどの条件を満たせば薬を処方できる州もあるという。現代の日本の心理学のレベルは、もはや国際的水準に達していることから、アメリカと同等と認識して差し支えない。今後、益々優秀な後輩が出現することを思えば、今からその態勢を整えておくことは必然の行為と言える。資格の向上とそのための段取りの充実、さらに今後も追求されることを期待する。



Profile—水口禮治

1962年、立教大学大学院文学研究科修士課程修了。1979年、文学博士（論文博士）。神戸八代学院大学（現・神戸国際大学）、立教大学、東京成徳短期大学で教授を歴任。現在は株式会社東京総合心理研究所社長を兼職。専門は社会心理学、産業心理学、認知心理学など。主な著書は、『常識力を身につける技術』（河出書房新社）、『人格構造の認知心理学的研究』（風間書房）、『「大衆」の社会心理学』（プレーン出版）、『こころの聴診器』（邑心文庫）、『無気力からの脱出』（福村出版）など。ユークキャン通信講座「心理学入門」を監修。特許権取得「文字-色名検査（適性検査）」の開発（東京総合心理研究所）。

心理学 ミュージアム



法政大学文学部心理学科 教授
吉村浩一

Profile—よしむら ひろかず
京都大学大学院教育学研究科教育方法学専攻博士課程満期退学。京都大学教養部助手、金沢大学文学部講師、助教授、明星大学人文学部教授を経て、2003年より現職。専門は知覚・認知心理学。著書は『運動現象のタキソミー』、『逆さめがねの左右学』（いずれもナカニシヤ出版）。

握力計いろいろ



写真1 新潟大学に残る安藤研究所製のスメッドレー式握力計



写真3 東北大学に残るパリにあるBoulitte製のヴェルダンの握力計



写真2 新潟大学に残る島津製作所製のコリン式握力計



写真4 金沢大学資料館に残る山越工作所製の継続握力検査器



写真5 新潟大学に残る島津製作所製のカツテル氏指力計

握力計は心理学の実験機器ではなく、体育領域での測定器と思われることでしょう。しかし、わが国に現存する心理学古典的実験機器の中には、握力計が何種類も含まれています。背筋力計など他の部位の筋肉測定機器まで含めると十数点に達します。実は、体育関係の大学や学部には、棍棒や亜鈴など昔の体育用具は残されていても、体力を測定する古い計測器類はほとんど残っていないようです。したがって、体育関係の人たちにも、心理学の古典的実験機器に興味をもってもらえれば幸いです。握力計など筋力を測定するための機器は、心理学ではかつて、本来の目的である筋力の最大値を測る目的とはひと味違う使われ方がなされてきました。それについてはあとで紹介することにして、まずはわが国に現存する何種類かの古い握力計を紹介することから始めましょう。

写真1に示した「スメッドレー式握力計」は、現在も使われているものなので、使い方はわかりでしょう。この写真は新潟大学に残る安藤研究所製の握力計（NG00045）で、大正末から昭和初期に作られたものと思われます。「スメッドレー式」の古いものでは、山越製作所製（関西学院大学と東北大学）や竹井機器工業製（京都大学）のものも現存しています。

写真2は、新潟大学に残る島津製作所製の「コリン式握力計」（NG00049）です。今では使われていないものなので、使い方と特徴を簡単に説明しましょう。楕円形の金属製の輪っか部分を片手で握りしめると、握力値が中央にある目盛り盤に表示されます。握り方がスメッドレー式とは異なり、強く握りしめるとかなり痛く、測定値は低めに出たようです。計測できる最大値が65kgと、100kg近くまで測れるスメッドレー式のものよりかなり低く設定されています。

写真3は、東北大学に残る「ヴェルダンの握力計」（TH00021）で、パリにあるBoulitteという会社で作られたものです。下の黒い部分を手のひらに当て、指で中央部の金属を握って握力を測ります。東北大学にはこのタイプの握力計が大小2台残っています。パリ製のしゃれた造形で、収納ケースも華美です。

さて、心理学では筋力を測る機器を最大値の測定以外にも用いていたと冒頭に書きましたが、それを示す手がかりの一つが、写真4の「継続握力検査器」（金沢大学資料館蔵 KZ00017）にあります。これは、基本はスメッドレー式の握力計ですが、それに加えて円筒に巻き付けられた記録紙に鉛筆で軌跡を描く部分が加わっています。これは握力を紙に記録するための仕組みですが、円筒部分の動きに特徴があります。握力計を1回強く握りしめて緩めると、そのたびごとに円筒が一方に進むラチェット機構になっています。1回ごとに記録紙は歯車の歯一つ分、わずかな進みで止まり、その試行の最大握力値をまっすぐな線で描きます。たとえば、メトロノームの音に合わせて10回強く握っては緩める動作を繰り返すと、記録紙上には少しずつずれた10本の棒グラフ状の線が描かれます。繰り返すたびに疲労が増したり、むらっ気があると、クレペリン検査のように10本の線はだんだん短くなったりガタついたりします。最大握力はそれほど強くなくても、作業を繰り返しても握力を一定に保てる人を必要とする仕事があります。たとえば、今はもう見かけませんが、駅の改札口での切符切りなどです。大正末から昭和初期の心理学では、この握力計を「継続握力検査」と名づけ、職業適性検査の一つに含めていました。

さらに、こんな使われ方もしていました。握力計に似たものに指力計があります。親指と人差し指とで挟む力を測定するもので、写真5に示した新潟大学の「カツテル氏指力計」（島津製作所製 NG00055）が現存しています。この計測器を利用したデモンストレーションが、東京帝国大学心理学教室編（1910）の『実験写真帖』に掲載されています。そこにはごく簡単にしか触れていませんが、「感情の実験」と称するいかにも心理学らしい使い方が紹介されています。カイモグラフなどで時々刻々の指力変化を記録しておき、感情を変化させるような刺激（たとえば嫌な臭い）を与えます。その臭いに嫌悪感などの感情変化が生じると、指力を一定に保つことができなくなることを想定して実験を行います。目に見えない感情の動きを、握力や指力の変化という客観的指標で捉えようとする姿勢に、明治時代の日本の心理学が科学を志向していたことが読み取れます。

特集

保育と心理学 新しい関係を目指して

保育というと、発達心理学や教育心理学、あるいは相談援助といった心理学の諸分野と密接な関わりをもっていることは自明のように思えます。実際、保育者養成校では心理学に関する科目が必修となっていますし、その知識が大切であることに異を唱える保育者はいないでしょう。また、特に子どもを対象とする心理学の研究者であれば、幼稚園や保育所などの保育実践の場でデータを収集したことがあるという人も多いはずです。しかしその一方で、心理学研究と保育実践の間に微妙な距離感を感じている人も実は少なくないのではないのでしょうか。

本特集では、保育と心理学について様々な視点・立場からその関係性を問い直してみたいと思います。「心理学を勉強してもなかなか保育実践に活かせない」「保育学と心理学はそもそも違う」で終わらせず、保育において心理学がどのように貢献できるのかや、保育現場から心理学は何を学べるのかを考えていきます。両者がお互いに学び合い、発展するためには何を認識しておくことが大切なのかを考える機会になればと願っています。

(旦 直子)

心理学は保育に いかに貢献できるか

白梅学園大学大学院 特任教授
無藤 隆 (むとう たかし)

Profile—無藤 隆

東京大学教育学部卒業。東京大学大学院教育学研究科博士課程中退。聖心女子大学助教授、お茶の水女子大学教授などを経て現職。日本質的心理学会理事長、日本発達心理学会理事長、保育教諭養成課程研究会理事長、中央教育審議会委員、内閣府子ども・子育て会議会長などを歴任。専門は発達心理学・教育心理学、保育・幼児教育、小学校教育。著書は『幼児教育のデザイン』（東京大学出版会）、『新しい教育課程におけるアクティブな学びと教師力・学校力』（図書文化社）など。



心理学特に発達心理学を中心に、それが保育・幼児教育（以下、まとめて「保育」）をいかにより良いものにしていけるかについて検討したい。主にこの数十年の保育現場（幼稚園・保育所等）への私の関わりと、また並行して、幼稚園教育要領や保育所保育指針やその他の基準や関連する制度（例えば「子ども・子育て支援制度」）の施策作成に関与してきた経験、自治体等での保育現場援助の実質的・制度的な支援活動（例えば幼児教育センターの設立や巡回相談の拡充）の設置や充実への営みなどを元にそこに心理学的知見を踏まえて関わりがいかに可能かを論じたいと思う。おそらく心理学を元々専攻し、各地域で私などの行ってきかたと近いことを試みている方々も少なくないと思うので、その参考に供したいとも思う。そこで、必ずしも心理学の果たす役割の総体を扱うわけではないので、関連文献として例えば、次のものなどを参照されたい。（無藤隆・長崎勤（編）（2012）『発達と支援：発達科学ハンドブック第6巻』新曜社）

研究エビデンスや基礎的研究知見の果たす役割

心理学としてトレーニングを受け、その知見をアップデートしつつ、なおかつ保育などの実践現場に関わり、むしろそれを仕事のメインとするすれば（それはつまりプラスのサービスとしてではなく）、そういった心理学的知見はどう使われ役立つのであろうか。心理学から発してそういった実践に関わる際、心理学の

発想を大きくは活かすにしても、その後の心理学の実証研究をフォローして役立てることを放棄する場合もけっこうあるようだ。そうでなく、役立てていくにしても、大きく四つほどの類型に分けられそうに思う。

第一は応用場面における実証研究者としてである。とりわけ近年、実践に関わるエビデンスが求められ、そのための方法論も進んできた。ランダム割り当てによる実験は難しいにしても（欧米ではかなりある）、大規模縦断研究やその他の手法により、保育の影響を実証することや媒介・緩和要因を見いだすことである。また基礎から踏み出して応用的な提言に基づき介入や支援や実践の変革の試みを行おうとして、その実証的な成果を捉えるものである（Translation Researchと呼ぶこともある）。それは心理学・経済学・社会学などの特に数量的統計的な方法論に基づく。

第二は並行させていくやり方であり、多くの保育者養成校に勤務する教員・研究者が採用しているようである。つまり、大学院時代からの基礎的な研究を行いつつ、現場に関わる支援や実践研究を行うのである。そこでは必ずしも二つの基礎と現場への関わりとの関係が意識されず、現場固有の広義の研究的成り立ちへの関心は薄い。

第三は実践現場への関わりを経験を活かしつつ、もう一つの心理学の可能性（alternative psychologies）を創り出していくことである。そのためのヒントは実験心理学からかなり外れ

るにしても、状況論や社会的構築主義やその他の社会的文化的アプローチで盛んである。様々な哲学・思想からの影響を受けて、構想し、実践を変えていこうとする人たちもいる。

第四は実践現場への助言活動の中に心理学的知見を活かそうとする立場である。私はどちらかと言えばこれに最も近い。基礎的研究に学びつつ、それを直接に適用するというより、それを手がかりに実践現場に即して新たな可能性を考え、助言へと変えていくのである。

こういったいくつかのアプローチがあり得るのは、逆に言えば、心理学の通常の基礎的知見をそのまま適用することはできないという経験があるからである。ほとんどの知見はたくさんの要因が働くため、確率的なものとなる。しばしば一つの働きかけの変数の効果量が小さい。いくつもの媒介し緩和する要因の中で働く。多数の変数が相互作用する中で意味を担う。多くの変数は適切に測定することができず、せいぜい近似的な指標があるだけである。

とりわけ保育のような実践として確立された領域では、膨大な数の現場があり、実際に保育者がいて成り立っており、制度的にも規制が掛かり、何より保育者自身が伝統的な多数のコツに頼って実践を行っている。しかも、そのコツは言語化が容易ではなく、また場合によって使い分けていくものでもある。現場の物理環境の人間関係的な働きが重要であるが、それらの多くは以前のものを受け継ぎ、改良していくものであって、個々の保育者は必ずしも自覚的でない。

カウンセリングとか療育などはそういった現場から子どもないし親子を引っ張り出して、新たな場を構成して行うことが多く、そこでは心理学的知見は比較的直接に適用できる面もある。だが、保育現場そのものは今述べた事情により既に多数のコツの絡み合いの中で動いており、そこに心理学の知見を直接に持ち込むことは難しいし、もしかすると弊害を生む可能性もある。むしろ、保育者の持つ実践的知恵への敬意を持ち、そこでの協同作業の中で実践現場の外で成り立つ知見を活かさねばならない。しかも、心理学的知見はそのような外から持ち込み

うる知見のすべてではとうていなく、保育現場に研究者として関わるとしたら狭い専門だけに限っていくわけにはいかない。

さらに保育は外からの研究者が替わって実践することではない。外からは助言に止まり、あくまで実践は当事者である保育者の問題である。だから、外からできることは勇気づけ(empowerment)であり、それはまたいかにして保育者の構想し選ぶ実践の可能性を広げるかでもある。

実践研究や事例研究の果たす役割

実践研究というあり方を認めるのかどうか。基礎的研究のみならず応用研究にしても実験的ないし統計調査的なアプローチが主流であるが、それ以外の方法論を組み入れつつ(とりわけ質的方法)、実践者のいわば感覚的直感的な実践の知恵／ノウハウ／コツを活かし、また現場での実際のあり方の記述から発して、その改善に向かおうとするものである。日本では伝統的に特に小中学校の教員がその授業実践について記録に取り、その授業の進め方について検討を加える実践研究が先進的学校・教師により担われてきた。またそれを助長するものとして指定研究が文部科学省や教育委員会や民間財団などで行われ、多少なりとも研究費を提供している。保育の世界はそれに準じて、そこまで実践研究は活発ではなかったが、その伝統は長く(おそらく昭和の初めあたりから)、そして近年のその活性化は特筆に値すると思う。

そういった広義の研究は必ずしもアカデミクな意味での研究ではない。何より先行研究をまとめ、それとの関連で自分の研究を位置づけるという習慣がない上に、そういった実践研究を概括するような場がないし、まとめる手立てもノウハウレベルのものは現場の個別事情に依存し、またかなり直感的な記述のために難しいところがある。保育者自身も自分の実践の力を入れた点を主に述べるにしても、それがどのようにして成立したかを細かく記述するとか、理論的に要点をまとめるという習慣がない。さらに、理論を使うとしても特定の例えば保育現場

をリードしてきたいわばカリスマ的指導者の理論を祖述するに止まり、理論と実践とのつながりが曖昧な上に、反証可能ほどの詳細が記述されない。

だが、そういう難点は実践研究が無意味だということ必ずしも意味しない。確かに多種多様な実践知により現場の実践は動いているのであり、それをすべて例えば心理学の知見で説明するのは一面的で強引な切り取り方となるだろう。また近年、質的な研究の方法論の導入により、詳細を多少とも反証できるような、あるいはせめて理論との対応を見ながら微細にわたり吟味し直せるようなやり方が広まってきている。そういう動きの中で研究者が開発してきた基礎的な知見の諸々と現場の実践の中の多様な実践知のつながりの記述が可能になりつつあると考えるのである。

心理学は有効か、その実例による検討

保育の世界に対して、心理学のトレーニングを受け、その知見を学び、時に心理学としての研究を行うような人間が関わって、どのような役立ち方ができるのだろうか。もとより単に心理学の解説を行い、役立たせるのは現場側の保育者の問題であるという割り切り方もある。あるいは心理学の知見をそのまま現場に持ち込み、その現場の保育の善し悪しをそれで切り分けることをすることも不可能ではないかもしれない。だが、そうではなく、研究知見と先ほどから述べている現場側の実践の知恵を結びつけ、しかも何らかの保育の改善を行おうとするとすれば、その志向はいかにして実質的なものとなりうるのだろうか。以下に私の行ってきたことを例として挙げながら、その可能性を論じよう。

既に述べたようにカウンセリングなどの子ども・親子を相談室等で支援する試みがあるわけだが、それに近い現場支援として、個別の子ども・親子などの支援を実際に園に出向いて行うことがある。多くは発達障害などの疑いがある場合だが、そうでなくても、何らかの困難を抱えている子どもだったり、また保育者側がどう

保育してよいか戸惑いを感じている場合である。このための心理学的原則は比較的研究も多く、幼児期の発達障害が疑われる子どもの視点として多くのノウハウが蓄積されてきており、それは心理学とかなり整合的なものとなっている。

以下に述べるのはそういった心理学の開発してきたものをいわば直線的に応用するものを越えた関わり方である。そこでは、心理学はもちろん、多くの学問を背景とし、同時に現場の実践のあり方に精通していく努力が求められる。

個々の園の保育のあり方への支援

個々の園でのカリキュラムや指導のあり方を現場の実践者と共に検討していくことや個々の園での保育者の子どもへの関わり方を見ながら、その改善を助言すること、さらにそういう仕組みそのものを開発していくことが多くなされており、そこに心理学専攻者が関わることも増えてきた。

私は年に2回ないし3回特定の園を訪れる「園内研究会」への関わりを長年続けており、既に10年以上関わっている園もいくつかある。そこでは何をしているのか。典型的なルーティンはこうなる。まず、午前中、保育活動を見る。午後、担任などを交えて話し合いをする。改めてそこから助言をする場合もある。また特定の実践上の課題が出されることもあり、それに沿って答えることもある。一緒になって特定のカリキュラムや指導の仕方やあるいは園内の環境における施設・設備等の開発や改善を行うこともある。

そこでの助言とは研究者としてアカデミックに学び考えてきたことともに現場実践を見て、実践者と共に考えてきたことが背景にある。同時に、幼稚園教育要領など現場の保育を大まかに規定している方針があり、その解釈に基づく面もある。例えば、乳幼児期の発達心理学の知見や動機づけの心理学の進歩、神経心理学の最近の知見などを頼りにできる。さらに近年、保育を巡るエビデンスが欧米を中心に蓄積されてきており、それをベースにしての理論化も進ん

できたので、それを参照することもある。最も多いのは日本各地さらには世界的に優れたとされる実践群があり、そのやり方や趣旨を参考にすることである。

そこで心理学の知見を使うのには留意すべきことがある。何より心理学の知見をなまに出すことをしない。必ず現場実践の進展の中でまた保育者の考え方をくぐらせて論じる。特定の心理学の知見で筋を明快にすることよりその場で使えそうなこと役立つようなこと、現場の保育者に響きそうなことを選ぶ。だがもちろんそのような解説の仕方を努力するのであり、さらに心理学の知見でのむしろ発展に通じるかもしれないと思えるところを現場側から取り出したいといつも考えている。それに近い心理学の流れは文脈ごとの発達という標語によって発達心理学の有力なアプローチとなりつつある。

要領・指針の改訂等への関与

保育現場での保育の方向性を規定する基本が幼稚園教育要領や保育所保育指針などであり、おおむね10年に一回改訂される。その改訂は担当省庁の課が責任を持つのであるが、研究者・実践者の部会を作り、そこで2年以上の議論を経て、決められる。私はそこに三度にわたって関わる機会を得たが、特に2017年3月告示の幼稚園教育要領では中心的な役割を担った。

今回の改訂の要点は、幼稚園・保育所・認定こども園のカリキュラムを共通化すること、小学校教育への接続を強化し乳幼児期の教育の土台を明確にすること、それらを貫く柱として資質・能力を基本に置き、その成長を幼児期の終わりまでに育ってほしい姿として理解可能なものとするところである。そもそも子どもの発達が園種により大きく異なるはずもなく、園で預かる時間や年齢で大きく発達が左右されて良いはずもない。特に乳幼児期の発達は学校固有の学習ではないので、その普遍性はかなり大きく想定できる。また、小学校との関連において、乳幼児期の芽生えとしての発達が後の教科教育を構成するようになることは心理学で多くの研究

がある。言葉は言うまでもなく、数でも音楽でも多くの研究がある。そしてその教育を通して促す際の子どもの力の発達は知的な面と社会情動的な面とに分かれ、さらに知的な面は物事の特徴を見いだす知識に関わる面とその特徴を考慮して問題解決をしていく思考する面とがある。その三つを資質・能力と呼び、それが内容領域ごとにどう異なり、幼児期の終わりにはどのような具体的なあり方を示すかを「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」として示している。これらの改訂の特徴はいずれも心理学を中心として保育の実践的検討とそのエビデンスの収集から浮かび上がってきたものである。それをさらに保育実践の改善に活かすためにもこの分野への心理学研究者の寄与は大きい。

心理学と実践知と教育思想と制度改革の交錯

乳幼児期の発達と教育のあり方の検討は興味深い主題を形成していると私は考えている。その特徴づけが十分に制度的に確立されていないためにまだまだ開拓の余地が大きいということがある。さらにそのエビデンス収集は世界的には急速に進みつつがあるが、特に我が国ではそれが遅れており、その推進が望まれる。いずれも心理学の寄与するところは大きい。

その上で、特に教育としてのあり方について三つの顕著な特徴がある。既に述べたように極めて多くの実践的な知恵が詰まった実践領域であり、その解明なしに何かの原理に基づいた教育方法を持ち込むことはおそらく機能しないし、時に弊害を生むかもしれない。その実践の「可視化」を工夫し、その実践の言語化に努力する必要がある。第二に、保育という実践は子育て全般と類似しながらも、園という独自の環境において保育者という専門的資格を持った経験者が何年もの経験と研修を積んで取り組んでいる。それを規定するのは制度であり、それに支えられた研修である。第三に保育は常にそのあり方への思想的な発想と理念に支えられている。それらの絡み合いこそこの分野を刺激に富み、研究として豊かな場としているのである。

保育者養成校における心理学教育の役割

和洋女子大学こども発達学科 准教授

大神優子 (おおがみ ゆうこ)

Profile—大神優子

2007年、お茶の水女子大学大学院博士課程修了。博士（人文科学）。保育士（試験で取得）。2008年、和洋女子大学専任講師。2013年より現職。2016年12月～2018年3月、保育士養成課程等検討会ワーキンググループ構成員。専門は発達心理学。著書は『大学1・2年生のためのすぐわかる心理学』（共著、東京図書）、『Gakken 保育 Books 3つのカベをのりこえる！保育実習リアルガイド：不安 日誌 指導案』（分担執筆、学研教育みらい）など。



心理学＝大事だけど難しい？

幼稚園教諭や保育士をはじめとする保育者養成校（以下、養成校）では、年間を通じて実習がある。養成校の教員として実習先にかがう際、担当科目を尋ねられることがある。発達心理学等ですと答えると、「心理学！難しいのがご専門なんですね。でも大事ですよ。学生の時はさっぱりわからなかったけれど、現場に出ると、発達理解の重要性を痛感しています」というような反応を返されて苦笑することが多い。

この「重要だとは思いますが難しい」または「面白いけれど実習や保育にどうつながるかかわからない」あたりが、養成校で心理学を担当する教員がよく向けられるものではないだろうか。

保育者養成課程たちあげのタイミングで大学教員をスタートして10年が過ぎた。その間、法令改正や大学の改組が続き、毎年のようにカリキュラムの変更作業に従事してきた。さらに、平成29（2017）年告示の保育所保育指針の改定を踏まえた今回の保育士養成課程等の見直しでは、ワーキンググループ¹の末席にお邪魔する羽目にもなった。この特集にお声がけいただいたのもこのご縁なので、未だ試行錯誤している身ではあるが、カリキュラムを手がかりに心理学教育の役割を考えてみたい。

「保育の心理学」ができるまで・できてから

心理学出身の教員が養成校で担当する科目は教員の専門にもよるが、「保育の心理学」をはじめ「保育内容（人間関係）」や「障害児保育」な

ど多岐にわたる。本稿では、保育士試験²で「〇〇心理学」に対応するものを中心にみていく。

保育士養成課程はこれまでに何度か修正され、それに伴い保育士試験科目も変更されてきた。表1に近年の変更を示す。2013年度試験で登場した「保育の」心理学は、それ以前の発達心理学・教育心理学という伝統的な心理学の分野を統合して設定された（詳細はH21～H25（2009～2013）の保育士養成課程等検討会）。これがさらに新カリキュラム（2019年度入学生から適用）では、「子ども家庭支援の」心理学という新名称が登場し、「心理学」という単語は含まない「子どもの理解と援助」と合わせ、養成課程での3科目が「保育の心理学」の内容となった。

新名称については、ベースとなった科目との関係を把握しておくとうわかりやすい。図1に再編の概要を示した。

表1 保育士試験における「〇〇心理学」の変遷

試験実施年度	～2012	2013～現行	2020～ (適用予定)
試験科目	発達心理学 (配点10)	保育の心理学 (配点20)	保育の心理学 (配点20)
対応する養成課程教科目 (全て必修、 「保育の対象 に関する理 解」系列)	～2010入学生 発達心理学 (講義2単位) ※教育心理学 (講義2単位)	2011入学生～ 保育の心理学Ⅰ (講義2単位) 保育の心理学Ⅱ (演習1単位)	2019入学生～ 保育の心理学 (講義2単位) 子ども家庭支 援の心理学 (講義2単位) 子どもの理解 と援助 (演習1単位)

※「教育心理学」は試験科目の内容としては明記されていないが、その後の「保育の心理学」が「発達心理学」「教育心理学」の統合科目として設定されているため、ここに記載した。

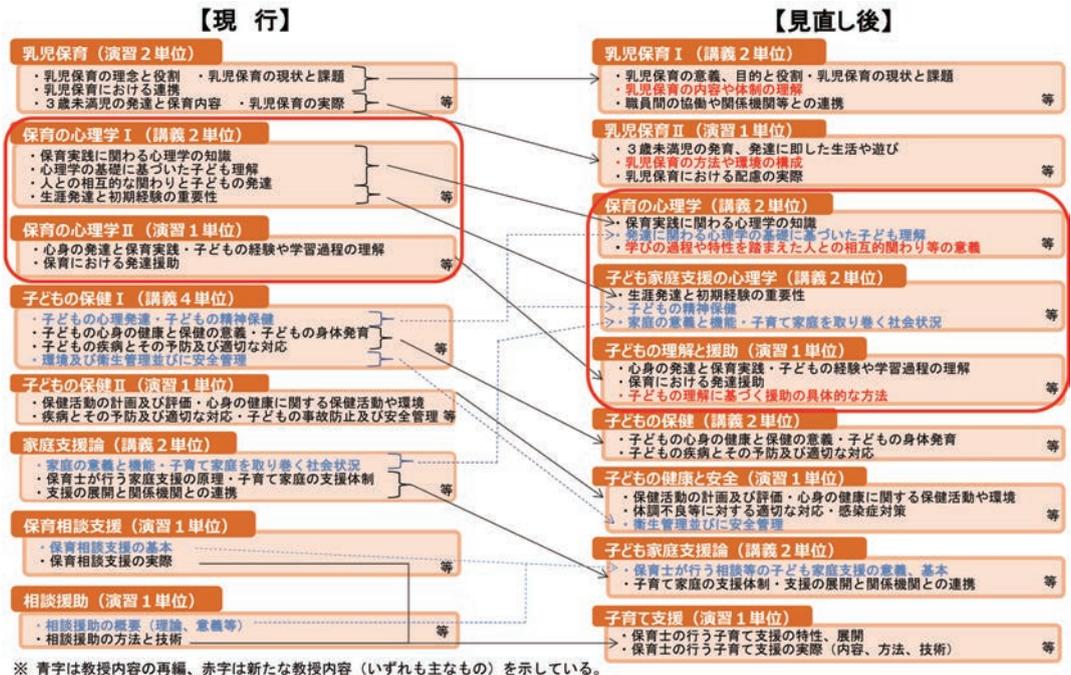


図1 保育士養成課程の見直しに伴う「教授内容の再編等 (主なもの)」(報告書より。赤枠は筆者による追加)

保育士の養成課程は2年制も多く、また、学生の多くは幼稚園の教員免許と合わせて取得する。そのため、必要単位数は増やさずに教授内容を充実させる必要があった。見直しでは、強化する部分を検討すると同時に、各教科の教授内容の統合が行われた (例:「子どもの保健」の発達部分を心理学科目に集約)。また、やや関係が複雑になるが、「家庭支援論」「保育相談支援」「相談援助」の相談系科目が整理され、その内容の一部も心理学に組み込まれた。

結果として、「保育の心理学Ⅰ・Ⅱ」の後継科目は3科目となった。様々な経緯を経て新科目名まで誕生したが、養成課程における「心理学」の必要性は変わらず、むしろ、より強化されたと解釈できるかもしれない。

何を教えるか — 心理学教育への要望

表2に、前述の3科目の目標と内容を示した。科目の再編を反映して変更部分 (下線部) が多い。内容も、子どもの発達を中心として、それを支える家庭や保育環境まで幅広い。

その中でも、科目「子どもの理解と援助」に含まれる内容「子どもを理解する方法」は、他

科目にはない心理学科目の特徴といえる。保育の中では、発達の見通しなどの時間軸を含め、膨大な情報処理が行われている。これらの情報に基づく保育者自身の感覚や判断を、どのように自覚し他者と共有するかは、中長期的にその専門性を向上させていくことが求められている保育者に必須の部分であり、心理学が貢献できる部分であろう。

なお、心理学に「保育実践」との関連づけを求める傾向はさらに強まっている。表3にその一部を示した。「保育の心理学Ⅰ」では知識の習得や理解に留まっていた部分が、見直し後は「心理学的知識を踏まえ～」とさらにその先まで具体化されている。

つまり、養成課程における心理学教育としては、心理学の知識や理解だけでは不十分で、それらを保育の文脈のなかでどう活かせるかまでつなぐことが求められているといえる。

いつ・どのように教えるか

— 体験を踏まえて繰り返し

「保育の心理学」は1年次科目に配置されることが多く、保育原理等と並んで、専門として

表2 保育の心理学Ⅰ・Ⅱの後継3科目の目標及び内容

	保育の心理学(講義・2単位)	子ども家庭支援の心理学(講義・2単位)	子どもの理解と援助(演習・1単位)
目標	1. 保育実践に関わる発達理論等の心理学的知識を踏まえ、発達を捉える視線について理解する。 2. 子どもの発達に関わる心理学の基礎を習得し、養護及び教育の一体性や発達に即した援助の基本となる子どもへの理解を深める。 3. 乳幼児期の子どもの学びの過程や特性について基礎的な知識を習得し、保育における人との相互的関わりや体験、環境の意義を理解する。	1. 生涯発達に関する心理学の基礎的な知識を習得し、初期経験の重要性、発達課題等について理解する。 2. 家族・家庭の意義や機能を理解するとともに、親子関係や家族関係等について発達の観点から理解し、子どもとその家庭を包括的に捉える視点を習得する。 3. 子育て家庭をめぐる現代の社会的状況と課題について理解する。 4. 子どもの精神保健とその課題について理解する。	1. 保育実践において、実態に応じた子ども一人一人の心身の発達や学びを把握することの意義について理解する。 2. 子どもの体験や学びの過程において子どもを理解する上での基本的な考え方を理解する。 3. 子どもを理解するための具体的な方法を理解する。 4. 子どもの理解に基づく保育士の援助や態度の基本について理解する。
内容	1. 発達を捉える視点 (1)子どもの発達を理解することの意義 (2)子どもの発達と環境 (3)発達理論と子ども観・保育観 2. 子どもの発達過程 (1)社会情動的発達 (2)身体的機能と運動機能の発達 (3)認知の発達 (4)言語の発達 3. 子どもの学びと保育 (1)乳幼児期の学びに関わる理論 (2)乳幼児期の学びの過程と特性 (3)乳幼児期の学びを支える保育	1. 生涯発達 (1)乳幼児期から学童前期にかけての発達 (2)学童期後期から青年期にかけての発達 (3)成人期・老年期における発達 2. 家族・家庭の理解 (1)家族・家庭の意義と機能 (2)親子関係・家族関係の理解 (3)子育ての経験と親としての育ち 3. 子育て家庭に関する現状と課題 (1)子育てを取り巻く社会的状況 (2)ライフコースと仕事・子育て (3)多様な家庭とその理解 (4)特別な配慮を要する家庭 4. 子どもの精神保健とその課題 (1)子どもの生活・生育環境とその影響 (2)子どもの心の健康に関わる問題	1. 子どもの実態に応じた発達や学びの把握 (1)保育における子どもの理解の意義 (2)子どもの理解に基づく養護及び教育の一体的展開 (3)子どもに対する共感的理解と子どもとの関わり 2. 子どもを理解する視点 (1)子どもの生活や遊び (2)保育の人的環境としての保育者と子どもの発達 (3)子ども相互の関わりと関係づくり (4)集団における経験と育ち (5)葛藤やつまずき (6)保育の環境の理解と構成 (7)環境の変化や移行 3. 子どもを理解する方法 (1)観察 (2)記録 (3)省察・評価 (4)職員間の対話 (5)保護者との情報の共有 4. 子どもの理解に基づく発達援助 (1)発達の課題に応じた援助と関わり (2)特別な配慮を要する子ども理解と援助 (3)発達の連続性と就学への支援

下線部は旧科目(現行科目)からの変更として、報告書別添1に示されていたもの

の最初の枠組み作りを担っている。この枠組みを実際の保育の文脈までつなぐ手段の一つとして、本稿では、養成校ならではの体験を踏まえた繰り返し(復習)をとりあげたい。

写真1は筆者が勤務する和洋女子大学こども発達学科における学内ワークショップの様子である。「KAPLA®ブロック」とよばれる小さな木片は年齢や使用量によって様々な遊びが可能であり、保育や教育の現場で多く導入されている(富安, 2008)。学生たちがあれこれ挑戦する中、保育現場でのエピソードとして、子どもが平たく並べていく隣で担任がさりげなく木片を立てる積み方をしたことが紹介された。友人の積み方を真似てみたり、どのように積みされているのか観察したりの中だった学生にとって、担任の行為の意図やその効果は、すぐい

表3 新旧保育の心理学の「目標」の比較(1科目のみ抜粋)

保育の心理学Ⅰ	保育の心理学
1. 保育実践にかかわる心理学の知識を習得する。	1. 保育実践に関わる発達理論等の心理学的知識を踏まえ、発達を捉える視線について理解する。
2. 子どもの発達にかかわる心理学の基礎を習得し、子どもへの理解を深める。	2. 子どもの発達に関わる心理学の基礎を習得し、養護及び教育の一体性や発達に即した援助の基本となる子どもへの理解を深める。
3. 子どもが人との相互的関わりを通して発達していくことを具体的に理解する。	3. 乳幼児期の子どもの学びの過程や特性について基礎的な知識を習得し、保育における人との相互的関わりや体験、環境の意義を理解する。
4. 生涯発達の観点から発達のプロセスや初期経験の重要性について理解し、保育との関連を考察する。	

注:「保育の心理学Ⅰ」の目標・内容は、「保育の心理学」以外の科目にも引き継がれていることに注意。



写真1 ワークショップの様子

メージできたようである。

座学の中に事例や映像を取り入れている教員は多いが、自分の授業以外でも学生がこのような体験をしていたことを知っていれば、以前の授業で学んだ発達の最近接領域や友達との協力、微細運動の発達などについて振り返る機会とすることが可能である。

復習の機会は在学中に限らない。「ままごと」は模倣や見立て、遊びの発達等様々な単元でとりあげられる題材である。1年生では自分の幼少期の体験と、上級生では実習園での体験と結びつけることができる。実習園でのままごとセットや子どもの様子がわかるととらえ方が変化すると思われるが、さらに保育者でも新たな視点がある（伊瀬，2018）。具体的には、異なる年齢クラスですべて同じままごとセットでよいか、1・2歳児クラスで、子どもたちにはなじみの薄いハンバーガーやソフトクリームがセットに入っていてよいか、などである。在学中にここまで気づくことは難しいが、ままごと自体を楽しむ子どもの内面の理解、保育者として整備する保育環境の教材、いずれもすでに表2の科目内容に含まれている。

心理学の知識は、入学直後の導入から卒業後の保育内容まで随所に関わる。しかし、学問としての教授内容と、学生の経験や保育現場が乖離している場合は、学生自身が関連づけることが難しい。カリキュラム内の位置（他科目との関係）、実習や体験との連続性を踏まえて、その後の「保育」までつなげるよう、授業以外でもせっせと関連づけていきたいものである。

おわりに — 今後に向けて

ある園長先生に「あなたは実習生と保育者（の卵）、どちらを育てているのか」と問われたことがある。日誌の書き方や手遊び等の保育技術も大事だが、それらは現場で育てていけるもので、養成校ではむしろ、子どもを見る視点や発達についてきちんと教えるように、というご指摘であった。

今回の養成課程の見直しでも、実践力を高めるために、理論的な背景や基礎は必須とされている。例えば、今回強化された乳児保育では、演習に加えて講義科目が追加された。

心理学は、実践力につながる包括的知識の基盤として必要不可欠なものとして位置づけられる。担当教員の専門にもよるが、子ども、保護者、保育者自身（保育者の卵としての青年期の学生を含む）のそれぞれにアプローチが可能である。

養成校では、実習訪問や研修など、保育者となった卒業生と再会する機会が多い。養成段階で教えたことが、その後どのように現場での学びを経て活用されているか（または忘れられているか）のフィードバックが随時ある。この恐ろしくもありがたい資源を活かして、心理学教育の役割を引き続き考えていきたい。

注

- 1 厚生労働省による「保育士養成課程等検討会」（座長 汐見稔幸氏）の下に設置された。詳細は厚生労働省HP「保育士養成課程等検討会（平成27年6月から）」参照。
- 2 保育士資格は、保育士養成課程以外に、保育士試験（筆記試験及び実技試験）でも取得することができる。

文献

- 保育士養成課程等検討会（2017）保育士養成課程等の見直しについて（検討の整理）[報告書] <https://www.mhlw.go.jp/stf/shingi2/0000189068.html>
- 伊瀬玲奈（2018）『「あたりまえ」を見直したら保育はもっとよくなる！：0.1.2歳児保育：足立区立園の保育の質が上がってきた理由』学研教育みらい
- 富安智子（2008）『フランス生まれのかぶらカプラ KAPLA：1枚の板から広がるそうぞうの世界』トル出版部／筒井書房（発売）

保育実践と発達心理学

— 相互の学びあいに向けて

神戸大学大学院人間発達環境学研究科 教授

木下孝司 (きのした たかし)

Profile—宮里暁美

京都大学大学院教育学研究科博士後期課程学修認定退学。博士（教育学）。静岡大学教育学部助教授等を経て、現職。専門は発達心理学。著書は『乳幼児期における自己と「心の理解」の発達』（ナカニシヤ出版）、『「気になる子」が変わるとき：困難をかかえる子どもの発達と保育』（かもがわ出版）、『子どもの心的世界のゆらぎと発達：表象発達をめぐる不思議』（共編著、ミネルヴァ書房）、『心の理論：第2世代の研究へ』（分担執筆、新曜社）など。



「だめだよ！おじさんにさせないと」

ある保育園で、子どもたちがカラーテープを三つ編みにして縄跳びの縄を作っていた。私も見よう見まねでやったのだが、無惨な状態。見かねた4歳児のユウが「教えてあげる」とやってきて、私のもっているテープを指さしつつ「こことここ、こっちやって」などと教えようとする。ただ、この不器用なおじさんにわかりやすく教えるのは至難の業だったようで、とうとう「やってあげる」と、テープを私から奪い取った。そのときのこと、この様子を見ていた5歳児のシュウが一言。

「だめだよ！おじさんにさせないと。自分でやらないとうまくならないよ」（そのとおり！おっしゃるとおり！）

シュウは私の横に座り、一つひとつの工程を区切って手本を示しながら教えてくれた。適当なところで、「じゃあ、あとはおじさん一人でやりな」と言って立ち去ったが、要所要所では黙って様子を見に来てくれた。

学生時代のアルバイト以来、保育現場ではこんな素敵な体験をさせていただいている。私にとって大事な場である。保育園でコミュニケーションや自他理解の発達研究を進め、保育園・幼稚園・療育施設において支援の難しい事例を保育者の方といっしょに考えるということ

細々と続けてきている。その際、心理学の知見を実践に直接持ち込むことには慎重な姿勢でいる。二つの異なる専門領域が協働するためには、自身のできることとできないことを自覚しておく必要があり、そのことで相互に学びあえるものが増えるだろう。

心理学ワールドの輝かしい流れに乗りきれず、さりとて心理学を「卒業」できないでいる私自身が、保育実践から学んできたことをまずは振り返ってみたい。

知りたいのは「サリー」の事か？

保育に限ったことではないが、実践は複数の人がさまざまな社会-文化的な文脈のもとになされるものであり、諸要因が複雑に絡み合って成立している。要因統制を行い仮説検証的な研究スタイルから出発した私にとって、保育実践は考えるべき問題を投げかけてくる存在である。ある種の視野狭窄を矯正し、本当に光を当てるべきものは何かを教えてくれるものでもある。一つの研究テーマから具体的にみでみる。

「心の理論」は、この40年、発達心理学の主要テーマであり続けている。そして、「心の理論」といえば、サリー・アン課題に代表される誤信念課題で測定されるのが通例となっている。一つの事態について、自己と他者が異なる信念をもっていることを理解できているかどうかに着目したのは、先人の大きな功績であったし、ある機能や能力を想定して、それを測定する方法を考案するのは心理学研究の王道であ

る。

ただ、保育実践において話題になるのは、会ったことも見たこともない「サリー」のことではなく、大好きな保護者、先生やクラスの友だちとの出来事である。気になる友だちをいっしょに遊ぼうと誘ったのに、「イヤ」と言われたとか、友だちの手助けをありがた迷惑に感じて思わず拒絶したとか、子どもの日常生活ではさまざまなドラマが起こっている。保育者のお話や記録には、それぞれが独自の持ち味を有した子ども同士の世界が満載されている。

「そんなこともあるんだよね」

ある幼稚園でのお昼時、午前中にたっぷり遊んだ後のこと。それぞれのグループごとに配膳して昼食を食べているのに、一つのグループだけ用意ができていない。当番のフウヤが疲れたからやりたくない、机に伏せたままだったのだ。先生が友だちが困っていることを伝えて促すのだが、いっこうに動こうとしない。そんなやりとりを聞いて、別の女の子がぼつりと言ったのが、「そんなこともあるんだよね」。その声をきっかけに、同じグループのユウキが準備を始め、フウヤは自分から約束した次の日は張り切って当番をしたのだった。

(岡村・金田, 2002)

私たちは、いつも合理的に判断できないし、いつでもがんばることはできない。この女児は、そんな厄介さや弱さを含めて人間を理解しつつある。ある意味"誇大広告"ではなく、「心」の理論というならば、こんな心持ちの理解まで及びたいところである。そこで、日常の一コマから、相互主観的なやりとりを捨てるのは、有力なアプローチとなろう。あるいは、実験的方法を踏襲するとしても、心の移ろいゆく性質に焦点を当てる(木下, 2008)のは有意義であると考ええる。

研究の単位の拡張から気づくこと

保育は、さまざまな活動から成り立っている。保育実践に即するならば、活動そのものが研究対象となり、自ずと研究の単位を拡張することになる。たとえば、冒頭で紹介した、教える行為もその一つである。子どもはおとなから教えられる存在としてみなされがちであるが、保育場面で出会う子どもたちは、実に教えたがりである。

この間、ヒトの教示行為は累進的な文化進化を推進するものとして、比較認知科学や行動遺伝学から関心が寄せられている(安藤, 2018)。発達研究では、教えるためには他者の知識状態を理解する必要があるとして、もっぱら「心の理論」との関連が注目されてきている。そして、実際の研究では、ボードゲームのルールといった言語的に伝達される知識が題材となっている。確かに、言葉を使って何らかの知識を伝達するのは「教える」ことの典型例のように見える。しかしながら、こうした実験の場面は日常の保育場面と距離がある。

そこで、ある保育園において、年中児と年長児のクラスを観察して、子ども同士の教示行為エピソードを収集して、次のようなことがクリアになった(木下・久保, 2010)。一つに、誰が教えるきっかけとなったのかを見てみると、教える側の子どもが「教えてあげようか」と申し出るエピソードが圧倒的に多かった。従来の研究では、研究者の「教示」によって子どもは教示を求められているのだが、あらためて教えたがる幼児の事実が明らかになった。

二つ目に、子どもが教える内容は手続き的知識に関わるものであり、その中でも跳び箱などの身体運動や、折り紙などの製作活動が多く、いずれもが言語的には伝えにくい技能を含むものであった。冒頭のエピソードのような、三つ編みの仕方など「技」の習得において、言葉による教示よりは、自分のしていることに注目させて観察学習を求めること(木下, 2015)や、あえて直接教えないことも有効な方法となる。文化人類学によれば、教育行動が観察されない社会があることが知られているが、その社会で

価値づけられた活動の特性によって、伝達の方法と経路が異なるのではないだろうか。活動の特性に注目することで、文化差の内実をさらに具体的にとらえられるだろう。

異国の地に赴くのと同じように、保育現場に行くことで、等閑視されてきた問題に気づくことができる。教示というと、近代的な学校教育の教授をモデルとし、さらにその前提として、「心の理論」研究は、他者理解を、表象としての心の理解に還元する表象主義に陥っている。私自身の場合でいえば、こうしたことについて考える契機を保育実践から与えてもらった。

保育現場にご縁のある者として

発達科学部のゼミの出身者には、幼稚園教員や保育士（保育士資格は試験にて取得）として活躍している方々が細々とだが続いてきた。また、大学院修了者は発達研究を進めつつ、幼稚園教員養成や保育士養成に携わっている。そこに発達相談員として働く卒業者も交えて、子どもに関わるいろいろな話をしながら、発達研究の議論もできる環境に感謝している。

大学の教育では、子どもの姿に驚き、面白がる目のつけどころが少しでも伝わればと願っている。そうした教育での貢献に加えて、編集委員会から頂戴したテーマ「保育に対して心理学が貢献できること」について、まだ自分にはできていないことも含めて、述べてみたい。

知り合いの民間保育園の園長さんと顔を合わせると、保育士不足の話題となる。保育士資格を持ちながら、保育園等で働いていない潜在保育士は70万人以上いるという。その理由として、賃金の低さや休暇などの労働条件の悪さがあることは、多くの人に知られるところとなりつつある（図1）。キャリアアップ研修による給与改善も進められようとしているが、その制度設計には課題もあるようである。また、「幼児教育・保育の無償化」に関わって、保育の質をあげるために保育士の待遇改善も必ずセットで、という関係者の声は大きい。

自戒を込めていえば、心理学者は「心のありよう」や「心がけ」に集約される心理主義に流

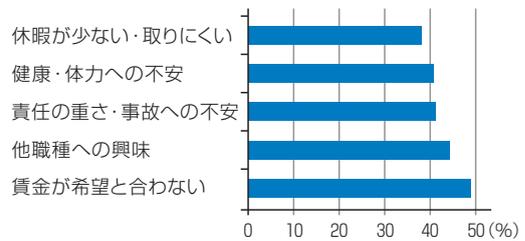


図1 資格を持ちながら保育士への就業を希望しない理由(回答者数958名, 複数回答可)

注 厚生労働省職業安定局による調査(2013年)から、割合の高い項目を抜粋して表記。

れやすい。「心がけ」だけでは変わらないものがあるし、数々の「心がけ」が保育者を追い詰めてしまうこともある。保育者が安定した生活ができ、安心して悩みながら実践できるための条件づくりに、それぞれの立場から発言・関与することは、「心理学者として」と言う以前に、保育現場にご縁のある者として考えたいことである。そして、大学で子どもの発達をともに学んだ人たちに、保育の仕事長く続けて欲しい。

また、保育の責任の重さや事故への不安が、保育という仕事に向かいにくくしていることも看過できない。待機児解消の名目で、保育の基準が緩和され、保育士の配置や保育室の面積などの基準は切り下げられて、保育士の負担は増している。「叱らない」保育をしたいと思いつつも、安全面の配慮から、禁止や制約の保育をせざるを得ないという切実な訴えを聞くこともある。

そのような中、とりわけ認可外保育施設において乳幼児の死亡事故が後を絶たない。事案によっては、「乳幼児突然死症候群のため予見不可能」として、施設サイドの注意義務違反が法的に問われないものもあった。それに対して、真実を知りたいという遺族が、子どもの命をないがしろにする劣悪な保育条件の改善を求める関係者の支援のもとに裁判を起し、施設の責任を明らかにしている。それは施設の法的責任を問うだけに留まらず、子ども、保護者、保育者が安心して過ごせる保育を築いていくための礎となっている。

その過程において、発達心理学のチーム（平沼博将氏（大阪電気通信大学）、服部敬子氏

(京都府立大学)、田中真介氏(京都大学)がうつぶせ寝の危険性について、遺族を中心とする「赤ちゃんの急死を考える会」が作成した動画を発達の視点から解析することで研究的な支援を行っている。それによると、首が十分にすわっている4~5ヵ月児であっても、うつぶせ姿勢でいったん頭が下がると数分でface downの状態に陥り、窒息のリスクが高いことなどを明らかにしている(平沼, 2016)。保護者を支えながら、保育の条件を良くする取り組みも進め、発達心理学が保育実践に貢献をしている好例だといえる。

子どもが愛おしくなる発達論

厳しい労働環境にあっても、保育にやりがいを感じて実践している保育者は多い。その原動力の一つは、子どもを愛おしく思う気持ちであり、子どもの発達への感動であろう。ただ、実践がうまくいかず、ネガティブな子ども理解に陥ることもある。その際、私なりに、交通整理的な役割が果たせればと考えている。たとえば、保育で「気になる子」を考える際、①困った行動が起こる場面とそうでない場面を、複数の目で確認して話し合いをすること、②子どもとの関わり方といった関係論だけではなく、遊びや日課のあり方といった活動論からとらえて、問題を子どもの内的要因にのみ帰属させないことなどに留意している(木下, 2018)。

発達心理学の立場から、保育者(学生も含めて)がよりいっそう子どもを愛おしく思う契機を作ることができればと願っている。ただ、それも道半ばであり、そのための私自身の課題は二つある。一つは、子どもの姿や発達を語る言葉を豊かにすることである。たとえば、「表象」は乳幼児期の発達を考える上で重要概念の一つであるが、1歳児が表象発生によって「思い当たる」ものに気づいて、感動とともにそれを命名する姿と結びつけて説明することができる。故・神田英雄氏は、保育実践を丹念に読み解き、発達研究の成果と結びつけながら、子どもと保育者が織りなす「ドラマ」を描いている(神田, 2013等)。こうした神田氏の仕事に

学び、子どもの発達を語る言葉を鍛えていきたい。

二つ目の課題は、発達論の再吟味である。精緻な実験や脳研究が進展したとはいえ、新しい自分を自らつくり出していく発達のメカニズムについてわかっていないことが多い。特に、保育・教育との関係で確認していきたいのは、次のことである。「今持てる力を発揮して、今の諸活動(生活)を充実させることが、大人には逸脱や脱線に見える行動となって現れることがあったとしても、結果的に、かけがえのない自分を築いていくことにつながる」。このことは個々の研究で実証するのは難しく、多くの研究を束ねて方向づける人間観・発達観と言ったほうがいいかもしれない。「今」の充実と子どもの発達については、幼児教育の先人が大切にしてきたことと重なると思われる。

経済効率原則が保育や教育にも浸透してきて、子どもの発達や実践をとらえる単位が短くなっている今日だからこそ、発達論の再吟味をすることは、保育者が安心して試行錯誤しながら実践できるように必要なことだろう。

文 献

- 安藤寿康(2018)『なぜヒトは学ぶのか：教育を生物学的に考える』講談社
- 平沼博将(2016)「うつぶせ寝」の危険性と保育事故をなくす取り組み 平沼博将他(編)『子どもの命を守るために：保育事故裁判から保育を問直す』クリエイツかもがわ
- 神田英雄(2013)『0歳から3歳：保育・子育てと発達研究をむすぶ〈乳児編〉』ちいさいなま社
- 木下孝司(2008)『乳幼児期における自己と「心の理解」の発達』ナカニシヤ出版
- 木下孝司・久保加奈(2010) 幼児期における教示行為の発達：日常保育場面の観察による検討 心理科学, 37, 1-22.
- 木下孝司(2015) 幼児期における教示行為の発達：学習者の熟達を意図した教え方に注目して 発達心理学研究, 26, 248-257.
- 木下孝司(2018)『「気になる子」が変わるとき：困難をかかえる子どもの発達と保育』かもがわ出版
- 岡村由紀子・金田利子(2002)『4歳児の自我形成と保育：あおぞらキンダーガーデン・そらぐみの一年』ひとなる書房

保育現場が心理学に期待すること

お茶の水女子大学人間発達教育科学研究所 教授
宮里暁美 (みやさと あけみ)

Profile—宮里暁美

国立公立幼稚園教諭、お茶の水女子大学附属幼稚園副園長、十文字学園女子大学幼児教育学科教授を経て、2016年4月より現職。文京区立お茶の水女子大学こども園園長、田園調布学園大学大学院非常勤講師を兼任。専門は保育学。著書は『子どもたちの四季：小さな子をもつあなたへ伝えたい大切なこと』（主婦の友社）、『0-5歳児 子どもの「やりたい!」が発揮される保育環境』（監修、学研プラス）、『子どもからはじまる保育の世界』（共著、北陽出版）など。



はじめに

「新しい出会い」には、いつも心惹かれる。今回、『保育領域と心理学領域の関係をさまざまなテーマから見つめ直し、互いに貢献できそうなことなどについて発展的に考察する』という企画による原稿依頼に対して興味をもち、「何を語ろう」という明確なイメージはないのにもかかわらず、原稿依頼をお引き受けしたのも、それが「新しい出会い」を連れてくるように思ったからだ。「新しい出会い」に心惹かれる、という思いは、私が現在、認定こども園の運営に関わっていることと関係がある。

認定こども園とは、幼稚園、保育園に次ぐ第三の乳幼児教育施設であり、幼稚園と保育園の機能を併せ持つ新しい可能性の追究だと私は考えている。

保育園と幼稚園は、乳幼児期の保育・教育を行うということにおいて共通だが、その成り立ちにおいては福祉と教育という違いがあった。管轄の省が違うことから、共通性よりも独自性のほうが強調されてきたように思う。そこに、子ども子育て支援新制度が導入され、保護者の就労の有無にかかわらず受けたい教育が受けられるシステムとして認定こども園が登場したことで、大きな変革が起こった。

幼稚園と保育園の共通性が強調され、合同の研究會や語り合いの場も増えてきている。翻って考えてみれば、保育園も幼稚園も乳幼児のよりよい育ちを支えているのであり、共通に考え合い、よりよい乳幼児教育の在り方を協力して確立

していくことに何も迷いはないはずなのである。

心理学領域と保育領域の関係を、保育園と幼稚園の関係に置き換えるのは、乱暴なようにも思えるが、あえて置き換えて考えてみたい。心理学領域と保育領域は、人間（子ども）を相手にする、という意味では共通しているが、違いのほうが目立っているのだろうか？ 現状はどうなのだろうか？ 人間を相手にし、深い洞察に価値を置いていることに共通項があるが、一方で、違いも歴然としてあるように思う。

心理学領域は、心と行動の学問であり、科学的な手法によって研究され、そのアプローチとしては、行動主義のように行動や認知を客観的に観察しようとするものと、主観的な内面的な経験を理論的な基礎におくものことがあるとされている。

一方、保育領域は、「多面的・多層的ないと なみについて、様々な角度からの学術的アプローチによって問いを立て検討していく、学際的な学問領域」¹であり、学問領域としての歴史は心理学ほどに古くはない。保育者の実践知に軸足を置いた学問領域だと考える。

それぞれの領域にはそれぞれの価値と可能性がある。それを合わせていくことで新しい地平が見えてくるのだろうか。この企画の中で可能性が見えてくることを願ってやまない。可能性を探すため日々子どもの中において、そこから学んでいる私自身の体験や思いを語ることからスタートしようと思う。それは「わからない」という言葉がポイントとなっている体験である。

「わからない」という状況につきあうということ

保育という営みは、「わからない」という状況に向き合い、根気よくつきあうことの中にあると考える。私は2016年4月より、新設の認定こども園の園長をしているが、その園の開園間もない頃に、印象的な出来事があった。保護者会で保護者に見せる写真を探していて目に留まった、2歳の子どもが土を触っている1枚の写真（写真1）だった。

私は、この写真を見て、「土いじりって、2歳児も好きなのね」と感想を言った。それは何気ない一言だった。しかし、この一言に対して思いもかけない言葉が返ってきたのだ。

「そうじゃないのよ。ただの土いじりではない。この写真は、あこがれの人のまねをしているところなのよ」と。

私は驚いて聞き返した。「え？あこがれの人が何？」と。すると、次のような答えが返ってきた。

「この子たちはね、Sさんのまねをしてるんですよ」。その答えの意味を説明すると以下のようになる。

開園間もない園の園庭の植え込みには、笹竹がびっしりと生えていた。このままだと花も育たないということで、用務主事のSさんが熱心に笹竹抜きをしてくれていた。なかなか抜けな



写真1 土を触る

い笹竹に対してひるまず挑むSさんの姿を一番見ていたのが、2歳児たちだった。子どもたちは、保育室の窓からよく見えて、園庭に出るとSさんの周りに集まった。そして、いつしか「Sさんやる」と言ってシャベルを持ってくるようになったという。だから、

土を触るという行為は、ただの土いじりではなく、Sさんになっているつもり、憧れの人のまねをしている姿だということだった。

1枚の写真をめぐる、よく見ていなければわからない子どもの状況を嬉々として語る先生たちの顔を見ながら、私はこのこども園に勤務できた喜びを感じていた。開園当初の忙しさの中で、保育を振り返る暇も無くよりよい保育を実現できないのではないかと悲観していた私は、一枚の写真に写っている子どもの姿のわけを教えてもらい、目が覚める思いになった。そうか、そうだったのか、と。

子どもを見る、ということ

この出来事は私の心に深く残った。保育を振り返る時間が十分にとれないという中でも、しっかり子どもを見ていく姿勢さえあれば、子どもの心の願いが見えてくるということに気づかされたのだ。そして私の中に次の言葉が浮かんだ。

「子どもの行為のわけに気づく語り合いは、子どもをもっとよく見ようという思いへと向かわせる」。それは保育者に保育する喜びをもたらす、保育の質向上につながる重要な視点だと考えたのだ。

私は、この大切な思いを、園内で、また園外で講演を行う際にもよく口にした。しかし、ある時、気づいた。「子どもの行為のわけに気づく」では、適当とは言えない。「気づく」としてしまうと、わけを解明することが目的になってしまう恐れがある。しかし、「わけ」は、そう簡単にわからないだろう。いろいろな理解の可能性は出たとしても、一つにはなかなか決められない。一つに決めることにそれほどの意味もないのではないか、そうも思えてきた。

そうなる、「気づく」よりも「考えようとする」「わかろうとする」という方向性の言葉がより望ましいように思えてきた。

「気づく」や「わかる」ではなく、こうか、ああか、と「考える」こと、「わかろうとする」ことが大事なのである。こうか、ああか、と考えている時、保育者は子どもをよく見るように

なる。見ていく中で、わかることも広がり、同時になぞも広がる。そこでまた考え、関わり、また考える。保育とは、そのような積み重ねの中にある。だからこそ、「子どもの行為のわけを考え合う語り合いは、子どもをもっとよく見ようという思いへと向かわせる」に意味があると考えた。

理解できないことの中にある積極的な意味

「保育学」を学問として樹立することに貢献した津守真は、子どもの傍らに身を置きながら、そこで展開していることについて深く省察し続けた。津守の言葉に「日々の生活の中で、子どもは表現し、私は理解する。そして、その理解に従って私は行為する。しかし、完全に理解してからはじめるのではない。私共は子どもとの生活の中に投げ込まれている。そこでは、私に理解できないゆえに否定するのではなく、むしろ理解できないことの中に隠された意味があることを知って、肯定的に受け止めて交わりを継続する。ともに生きる生活において、理解できないことに積極的な意味があるのを知ることが、相手をも自分をもよりよく生かす。」²がある。

津守の言葉は、子どもと過ごす状況の秘密を鮮やかに解き明かしている。私が子どもと過ごし、そこから学びを得ようとしているときの基盤に、津守の言葉がある。

「ともに生きる生活において、理解できないことに積極的な意味があるのを知ることが、相手をも自分をもよりよく生かす」という言葉は、子どもが生き生きと育つ保育の根源に関わっている。「理解できない」という事態の受け止め方によって、保育が変わってしまうのである。

「理解できないこと」に積極的な意味があると思わず、それは許されないことと考えていたとしたらどうだろうか。そうなるとできるだけ早く「理解できる」状態になりたくなり、「理解できた」つもりになってしまう可能性がある。ところが、保育者が「子どもはこうだ」と理解してしまったら（決めてしまったら）、保育者はその捉え方でしか子どもを見られなくなってしまう。大きな危険性があるのである。

津守が言うように「理解できない（わからない）ことに意味がある」と感じていれば、その状態を大切に受け止めながら、目の前の子どもとの関わりを継続させるだろう。それが「ともに生きる」生活なのである。私は、津守の言葉の根本にあるのが「わからない」という状態へのプラスの意識だと考える。そして、その状態を保ち続けるところに、あるべき保育者の姿勢を見るのである。

あるエピソードから

「わからない」という思いを抱えながら子どもと過ごした保育のあるエピソードを、以下に紹介する。

A児（5歳児）のお化けちゃんの絵

発熱のため園を早退することになったAちゃんの話である。Aちゃんは、保護者が迎えに来るのを待つ間に1枚の絵を描いた。屋根が壊れていて、その屋根の上にはクマちゃんがいて、屋根を直しているというような絵だった。家の中には調度品が描かれているけれど、誰もいなくてがらんどうのイメージだった。その子が翌日、具合がよくなって登園してきたときに持ってきたものが図1の上の絵である。

絵を見ながらAちゃんは以下のような話をした。

『ある日クマちゃんが屋根の穴を直していたら、急に雨が降ってきたら、お化けちゃんが来て、それで傘をくれた。それで傘を伸ばした。それでもクマちゃんはびしょぬれ。そして、それで下にいるお化けちゃんたちは洗濯したり、干したり、洗濯機で回したり、はしごを登ったり、こうやって温めたり、クマちゃん、寒いから温めました。』

Aちゃんはもう一枚絵を描いてきた。その絵には地下室が描かれていた（図1下）。階段を降りると地下室があり、そこにもお化けちゃんがいて、機械に薬を塗ったり、機械が壊れていないか調べたりしていた。

エピソードから考えたこと

お化けちゃんの絵を描いたA児は、気持ちを立て直すことが苦手で、みんなの動きに加わろうとしなかったり、気持ちがうまく伝えられないと泣き続けたりすることがある子どもだった。そのA児が、少しずつ変わり始めていたころの絵である。



図1 A児の描いた絵

頭が痛かったA児は、屋根が壊れている家の絵を描き、母親が迎えにきて家でゆっくり過ごした後に、あらゆる悩みごとを解決してくれるお化けちゃんの家をいっぱいにした。自分で考えた「お助けお化けちゃん」のことを話しているA児はとてもうれしそうだった。「何があっても大丈夫」というイメージを繰り返し自分に話しているように思えた。

A児がこの絵を描いて少ししたころに、ある出来事があった。運動会が近く、学級全体でリレーに取り組むことになったが、A児は加わろうとせず、座り込んだままだった。このようになることは予想できたのでそのままにしておいた。するとしばらくして自分から「入れて」と言って仲間に加わってきた。そしてすごい速さで走り通した。「Aちゃん、はやい」と友達からも認められる速さだった。

私とその姿を見て驚いていると、「どうして初めは走らなかったかっていうと、力をためて

いたんだ」と教えてくれた。力をためるという言葉がA児の口から出た時、私はA児が描いた絵のことを思い起こした。地下室で大きな機械が動き、何かを作り出している絵だ。その絵には「力をためている」というイメージがこめられているように思えた。

A児は、この後もいろいろな絵を描いている。いろいろな揺れながら育っていると感じさせられるA児を理解する入り口の一つに「絵」があるのではないか、と感じている。

おわりに

保育の中に身を置いていると日々新しい物語と出会う。目の前で起こることに応じる日々が保育の日々である。その日々の中で、子どもの中にも保育者の中にも何かがため込まれていく。それは何なのだろうか。問いは次々に生まれる。そして思う。重要なのは問いを持つことであり、問いへの向き合い方だろうと。

私たちが見出した「子どもの行為のわけを考え合おうとする語り合いは子どもをもっとよく見ようという思いへと向かわせる」という言葉をもう一度見ていこう。「子どもの行為のわけを考え合おうとする語り合い」において、私たちは明確な答えを早く確実に手に入れることを目標にしなかった。さまざまな見方を出し合い省察した。どこまでも可能性をひろげるという在り方で。それにより「子どもをもっとよく見ようという思い」が生まれ「よく見る」ということが出てきたのだと思う。

私が高領域の方々との出会いに心惹かれるのは、可能性の広がりを予感するからである。心理学の扉から保育の中の小さなエピソードを見たら、どのような見え方がするのだろうか。その話を聞きたいと思う。ゆっくりとした語り合いの中で、何かが重なり何かが広がれば良いと思う。

注

- 1『保育学講座① 保育学とは 問いと成り立ち』日本保育学会編 p.1.
- 2『子どもの世界をどう見るか：行為とその意味』津守真 NHK ブックス p.9.

ヒトと動物のコミュニケーション

私たちは動物に愛情を注ぎ、語り掛け、心を通じ合わせようとはしますが、動物には、私たち人間の気持ちがどのように伝わっているのでしょうか。今回は、気鋭の先生方に、身近な動物とのコミュニケーションに関する最新の研究について語っていただきます。動物たちをより身近にいとしく感じてもらえるきっかけになると幸いです。
(漆原宏次)

ネコからみたヒト

日本学術振興会特別研究員PD

高木佐保 (たかぎ さほ)

Profile—高木佐保

2018年、京都大学大学院文学研究科博士課程修了。博士（文学）。京都大学、同志社大学、佛教大学で非常勤講師兼任。専門は比較認知科学。著書は『マンガでわかるねこの心理学』（監修・共著、池田書店）など。



ペットフード協会の『全国犬猫飼育実態調査』によると、現在日本ではネコの飼育頭数がイヌの飼育頭数を上回ったそうです。ネコは名実ともに、益々身近な伴侶動物になりつつあります。本稿では、ネコとヒトとのコミュニケーションに関して、ネコがヒトの社会的な手掛かりをどの程度読み取っているのかという観点から、さまざまな最新の研究を紹介したいと思います。

ヒトが自分に注意を向けていることがわかる

他者の注意状態を推測する能力は、コミュニケーションを行ううえで大きな意味をもちます。特に、相手が自分に注意を向けているのかを知ることは、コミュニケーションの第一歩といえるでしょう。

Itoら（2016）は、異なる演技をする実験者二人のうちどちらから報酬をもらうのかを調べました。実験条件には、視覚条件／聴覚条件／視覚＋聴覚条件がありました（図1）。その結果、視覚＋聴覚条件で自分に注意を向け、さらに自分の名前を呼ぶ実験者のみ

条件	役割
視覚条件	
聴覚条件	
視覚＋聴覚条件	

図1 注意状態の理解の実験。ネコは視覚＋聴覚条件で、顔をネコのほうへ向け、名前を呼ぶ人物を選好した。

を、偶然で起こる確率を超えて選好を示すことがわかりました。このことから、ネコも自分に向けられた注意状態を理解している可能性が示唆されました。

ヒトが見ているところがわかる

注意状態を示す行動の中でも、物体に「視線を向ける」ことは、ヒトのコミュニケーションにおいて大きな意味をもちます。一説にはヒトの白目が他種と比較して大きいのは、視線方向の検出を促進するためだともいわれています（Kobayashi & Kohshima, 1997）。そのため、ヒトの視線方向を検出する能力をもつことは、ヒトと円

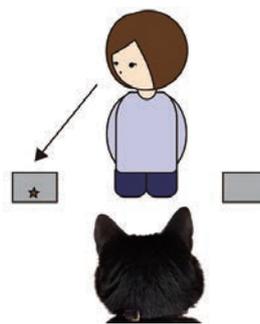


図2 視線手掛かり実験。ネコはヒトが視線を向けた容器を有意に選択した。

滑なコミュニケーションをするうえで重要です。ネコは、視線（と顔の向き）手掛かりを利用することができるのでしょうか？

Pongráczら（2018）は、ネコが二つの容器のうち、ヒトが視線を向けたほうを選択するのかを調べました（図2）。その結果、ヒトが視線を向けた容器を統計的に有意に選択することがわかりました（全試行中の70.42%）。ネコが選択を行うまで視線を向け続けた試行も、視線を向けた後すぐに正面にいるネコに視線を戻した試行もありましたが、それらの試行の種類に関係なく、視線手掛かりを利用できることがわかりました。

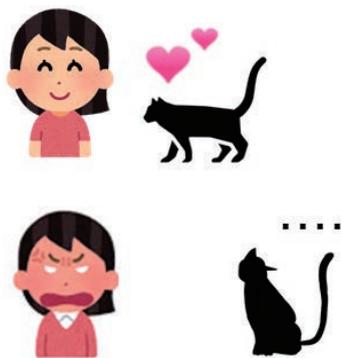


図3 表情の弁別実験。ネコは飼い主が嬉しそうな表情のときに、より接近した。

ヒトの表情の違いがわかる

ヒトは顔の表情を変化させることで感情を伝えます。ネコはヒトの表情の区別ができるのでしょうか。

GalvanとVonk(2016)は、飼い主/見知らぬ人が、怒った/嬉しそうな表情をしているときに、ネコがその人にどの程度接近するのか、どの程度ポジティブ/ネガティブ行動を表出するのかを調べました(図3)。その結果、飼い主が怒った表情のときよりも、嬉しそうな表情のときに、より接近する傾向がみられ、またポジティブな行動をとることがわかりました。このような結果から、ネコはヒトの表情を弁別していることが示唆されました。しかし、見知らぬ人に対しては表情の違いによる効果はみられなかったことから、ヒトの表情弁別ができるというよりは、飼い主の表情とそれに付随する事象(嬉しそうなときは、ごはんをくれるなど)を個別に学習したのではないかと考えられます。

飼い主の声から顔を予測する

ネコは飼い主の声と見知らぬ人の声を弁別することはできません(Saito & Shinozuka, 2013)、聴覚情報と視覚情報を統合した表象をもつかは明らかになっていません。そこで、それを確かめる実験(クロスモーダル統合実験)

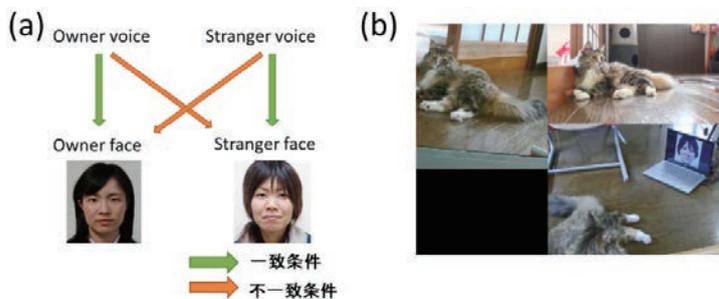


図4 クロスモーダル統合実験の(a)実験条件、(b)実験に参加するネコ(三方向から撮影)

を行ってみました(Takagi et al., under review)。この実験では、経験の違いによる差をみるために、家庭で飼育されている家庭ネコ、ネコカフェで飼育されているカフェネコを対象にしました。ネコをモニターの前に座らせ、被験体の名前を呼ぶ声を再生した後に、モニターに顔写真を呈示しました。この時、飼い主/見知らぬ人の声と顔が一致する条件と、不一致の条件がありました(図4)。もしネコが、飼い主の声と顔を統合した表象をもち、飼い主の声を聞いてその顔を予測するならば、不一致条件のときにその予測が裏切られ、画面を見る時間が長くなることが推測されました。その結果、カフェネコにおいては予測通り不一致条件を長く見るわかりました。一方で、家庭ネコは条件にかかわらず、同程度に画面を見る結果となりました。これらの結果から、少なくともカフェネコは、飼い主の声と顔を統合した表象を有していると考えられます。カフェネコは見知らぬ人の声と顔の組み合わせを日常的に経験していますが、家庭ネコはほとんどの場合、そのような経験はしていません。このような経験の違いが本実験の結果につながったのではないかと考えられます。

おわりに

ネコはツンデレでヒトに興味が

ないようにみえて、想像以上に我々の仕草を観察し、そこから社会的な情報を読み取っていることがわかってきました。互いを知ること、ヒトとネコがより良い関係になることを願っています。

文献

Galvan, M. & Vonk, J. (2016) Ma's other best friend: Domestic cats (*F. silvestris catus*) and their discrimination of human emotion cues. *Animal Cognition*, 19, 193-205.

Ito, Y., Watanabe, A., Takagi, S., Arahori, M., & Saito, A. (2016) Cats beg for food from the human who looks at and calls to them: Ability to understand humans' attentional states. *Psychologia*, 59, 112-120.

Kobayashi, H. & Kohshima, S. (1997) Unique morphology of the human eye. *Nature*, 387, 767-768.

Pongrácz, P., Szapu, J.S., & Faragó, T. Cats (*Felis silvestris catus*) read human gaze for referential information. *Intelligence*, in press.

Saito, A. & Shinozuka, K. (2013) Vocal recognition of owners by domestic cats (*Felis catus*). *Animal Cognition*, 16, 685-690.

Takagi, S., Arahori, M., Chijiwa, H., Saito, A., Kuroshima, H., & Fujita, K. Cats match voice and face: Cross-modal representation of humans in cats (*Felis catus*). under review.

ウマとヒトの絆を紡ぐ情動を介したコミュニケーション

北海道大学大学院文学研究科 准教授

瀧本彩加 (たきもと あやか)

Profile—瀧本彩加

2012年、京都大学大学院文学研究科博士後期課程修了。博士（文学）。日本学術振興会特別研究員PDを経て、2015年より現職。専門は比較認知科学。著書は『社会のなかの共存』（分担執筆、岩波書店）など。

大学時代の4年間、馬術部で毎日ウマ漬けの日々を過ごした。入部後すぐ、馬術部の先輩がウマの認知に関する卒論研究をしていることを知り、動物のこころを科学的に調べる比較認知科学という学問があることを知った。2年生から始まった専門の授業では、もちろん藤田和生先生（のちの恩師）の比較認知科学入門の授業を受講した。抜群に面白かった。

3年生で藤田先生のゼミに入り、卒論研究以降、霊長類のフサオマキザルの向社会行動・不公平忌避について6年間研究した。最近、家畜化以降ヒトとともに暮らし、共同作業を通して親密な関係を築いてきた、ヒトと系統発生的には遠いが空間的・心理的に近いウマを対象に、ウマとヒトの絆を紡ぐ情動を介したコミュニケーションに関する研究も進めている。今回はこの研究を紹介したい。

群れるウマ

ウマは本来群れで暮らす動物だ（図1）。群れの形態は二つある。一つはハレム群で、通常はおとなオス1頭に対して複数頭のおとなメスとその子どもによって構成される。もう一つは若オス群で、通常は複数頭の若いオスで構成されるが、出生群から離れたばかりの若いメスが混ざる場合もある。どちらにしても、ウマは親密な仲間と身を寄せ合い、一緒に食べた

り、眠ったりする。また、鼻を突き合わせて「挨拶」をしたり、遊んだり、毛づくろいをしたりする。喧嘩をすることもあるが、喧嘩の仲裁や慰めも見られる。自分と親密な仲間が他のウマと仲良くしているのを見ると、それを邪魔しに行き、親密な仲間を囲い込む。おとなオスが、他の群れのオスが群れの仲間接近するのを防ぐために仲間を囲い込むこともある。そうして、仲間同士の絆を育み、群れを維持する。

おとなメスでは、他のメスと絆を強く築けるほど、おとなオスからの攻撃が減少し、出産率と子が1歳まで無事に生存する確率（繁殖成功度）が高くなることも知られている（Cameron et al., 2009）。ウマにとって、仲間とうまくコミュニケーションをとり、絆を形成・維持することは、とても重要なことなのだ。

「空気」を読むウマ

では、ウマはどのようにして相手とコミュニケーションをとるのだろうか。もし相手の表情や音声からその情動を知覚できれば、相手に近づいてもいいか、隣にいたり毛づくろいや遊びに誘ったりしてもいいか、を的確に判断できる。例えば、相手がリラックスしていれば、近づくチャンスである。近づいてみて相手が受容の姿勢を見せれば、毛づくろいに



誘ってみよう、と判断できるだろう。一方、近づいた際に相手が耳を伏せて威嚇の表情を示し、それが怒りを意味していることがわかれば、それ以上近づくと噛まれたり蹴られたりするかもしれないと予測でき、ケガをする前に相手を回避することができる。このように、仲間の情動を読みとれると、コミュニケーションを円滑に行える。つまり、「空気」を読むことはウマにおいても必要なのだ。

実際、ウマの情動は表情や音声に反映され、ウマはその表情や音声の意味を理解して柔軟に対応する。例えば、ウマは見知らぬウマのポジティブな期待に満ちた顔やリラックスした顔の写真に比べ、怒った顔の写真に近づくのをおそれ、見ようとしめない（Wathan et al., 2016）。不機嫌な仲間へ近づいても親和的なやりとりが成立しないばかりか、攻撃を受ける可能性まであるため、ウマは仲間のネガティブな怒り顔への接近を控えるのだ。



図1 群れで暮らすウマ（北海道和種馬）

ウマはヒトに対してもまた「空気」を読む。ウマは、約5500年前に家畜化されて以降、ヒトとともに暮らしてきた。ウマは、移動や輸送といった使役家畜としての役割にとどまらず、スポーツやレジャーにおける伴侶動物としての役割も担い、イヌと同様、家畜動物の中でも特にヒトと親密な関係を築いてきたのだ。では、ウマはヒトのどのようなシグナルを読みとって、ヒトとの絆を紡いできたのか。実際、これまでに、イヌだけではなくウマもまたヒトの些細な身ぶり手ぶりや表情に敏感であることがわかってきた (cf. 瀧本, 2018)。例えば、ウマは、見知らぬ人の顔であっても、笑顔よりも怒り顔に対して最大心拍数に達するまでの時間が短くなる (Smith et al., 2016)。つまり、ウマはヒトの怒り顔をよりネガティブに捉え、警戒して身構えるのだ。このことから、ウマがヒトの情動を表情から読みとることが示唆される。

しかし、ヒトの情動は表情と声と同時に表れることもしばしばだ。そこで、私たちは、ウマがヒトの情動を読みとる際に表情と声に関連づけているかを、期待違反法を用いて検討した (Nakamura et al., 2018)。まず、ヒトの「笑顔」または「怒り顔」の写真をスクリーンに映し出し、ウマに呈示した (図2)。次に、その人が「褒めるトーン」または「叱るトーン」でウマの名前を呼ぶ声を、スクリーンのそばに設置したスピーカーから再生した。もしウマがヒトの情動を読みとる際にその表情と声に関連づけているなら、表情と声の情動が一致しないときに期待違反が生じ、表情と声の情動が一致しているときよりも声に素早く反応し、声が聞こえてきたほうを長く見続けるだろう、と予測し

た。また、そうした表情と声の関連づけがヒトとの直接経験によってのみ生じるのであれば、親しい人の刺激に対してのみ、期待違反が確認されるだろう、と予測した。実験の結果、ウマは、自身と親しい人については、その表情と声の情動が一致しているときよりも、一致していないときに、声に有意に素早く反応し、声が聞こえてきたほうを有意に長く見続けた。ただし、ウマは、見知らぬ人に対しても、ヒトの表情と声の情動が一致しているときよりも、一致していないときに、声が聞こえてきたほうを有意に長く見続けた。つまり、ウマはヒトの表情と声の情動が一致していないことに違和感をもち、その違和感はその人との直接経験がなくとも生じうるということがわかった。一連の研究により、ウマは、自身と親しい人だけに限らず、ヒトの情動を読みとる際にその表情から声色を連想することが示唆された。ウマは、ウマ同士だけでなく、ヒトとのコミュニケーションにおいても、その表情や声に敏感で、「空気」を読むのだ。

ウマにおける絆形成研究の展望

今後は、情動知覚に始まるウマ同士・ウマとヒトとのコミュニケーションがどんな絆をどのように形成していくか、そのプロセ



図2 スクリーンに呈示されたヒトの表情を見るウマ

スを詳細に検討して、ウマにおける絆形成のモデル化をめざしたい。その中で、特に注目したいのがポジティブ情動・行動同期が絆形成の促進に果たす役割である。ポジティブ情動が果たす役割については、表情や声・しぐさに表現されるポジティブ情動が社会的報酬となりうるのか、ストレス緩和に貢献しうるのか、といったことに注目して検討していきたい。また、行動同期が果たす役割については、行動同期が絆形成を促すのか、それとも絆が形成された後の絆の維持に寄与するのか、を調べたいと考えている。

文献

- Cameron, E. Z., Setsaas, T. H., & Linklater, W. L. (2009) Social bonds between unrelated females increase reproductive success in feral horses. *Proceeding of the National Academy of Sciences of the United States of America*, 106, 13850-13853.
- Nakamura, K., Takimoto-Inose, A., & Hasegawa, T. (2018) Cross-modal perception of human emotion in domestic horses (*Equus caballus*). *Scientific Reports*, 8, 8660.
- Smith, A. V., Proops, L., Grounds, K., Wathan, J., & McComb, K. (2016) Functionally relevant responses to human facial expressions of emotion in the domestic horse (*Equus caballus*). *Biology Letters*, 12, 20150907.
- 瀧本彩加 (2018) 「求め合うところ：人間と伴侶動物が育んできた絆」 鈴木幸人 (編) 『恋する人間：人文学からのアプローチ』 北海道大学出版会 pp.213-244.
- Wathan, J., Proops, L., Grounds, K., & McComb, K. (2016) Horses discriminate between facial expressions of conspecifics. *Scientific Reports*, 6, 38322.

イヌとヒトとの コミュニケーション

麻布大学獣医学部動物応用科学科 講師

永澤美保 (ながさわ みほ)

Profile—永澤美保

早稲田大学卒業後、企業勤務を経て、麻布大学大学院獣医学研究科動物応用科学専攻博士課程に入学し学位取得。2017年より現職。専門は動物行動学、比較認知学。著書は『日本の犬』（共著、東京大学出版会）など。



私が所属している研究室はイヌ連れ出勤OKである。そのため、4頭のスタンダード・プードル（母とその子ども達）が、研究室を自由に行き来し、勝手気ままに過ごしている。ある日、キュッキュと音がするので、PCモニターの横から覗くと長男がスリッパを楽しそうに噛んでいた。私と目が合うと、スリッパをそっと舐め始めた。私がおのまま黙っていると、次第に歯をあて、私から視線はそらさずに上目遣いでキュッキュと音をたてながら、またスリッパを噛み始めた。その間、私の頭の中では彼の一連の行動が、「あ、みつかった」「でも、噛んでないよ、舐めてるだけ」「怒らないの？ だったら噛んでいい？」と自動的に翻訳されている。イヌを飼ったことがない人は信じられないだろうが、私たちはイヌとみつめあい、その気持ちを想像しながら、当たり前のように話しかけ、会話をすることができるのである。

視線を介した絆の形成

私たちがイヌに惹きつけられ、あたかも家族や親しい友人と会話するように話しかけてしまうのは、イヌが視線をアタッチメント・シグナルとして使っているからではないか。私たちはそう考え、ヒトとイヌとのみつめあい行動に注目し、イヌの注視にど

のような機能があるのか調べた（Nagasawa et al., 2015）。ヒトの幼児のアタッチメントタイプを調べるストレージ・シチュエーション・テストの設定からヒントを得て、飼い主とイヌに、初めて訪れる実験室内で自由にふれあってもらったところ、飼い主をよくみつけるイヌとその飼い主の尿中オキシトシン濃度が上昇した。オキシトシンはもともと分娩や授乳に関わるホルモンであるが、最近では社会行動を制御する働きが注目されている。そこでイヌにオキシトシンを投与したところ、イヌの飼い主への注視時間が増加し、飼い主の尿中オキシトシン濃度も上昇したのである（ただし、メスイヌ限定）。少し不安な状況で、飼い主へ向けたイヌの注視がトリガーとなり、お互いのオキシトシン分泌と親和的な行動のやりとりのポジティブ・ループがつけられたのである（図1）。

このようなオキシトシンと親和的な社会シグナルを介した二個体間の関係構築のメカニズムは、げっ歯類や霊長類（ヒトも含む）の母子やつがいの雌雄を対象に研究されてきた。単なる親和関係とは区別され、特定の対象に対する特別な結びつきとして、「絆形成」と呼ばれている。上記の私たちの実験結果は、単に愛犬家を喜ばせるだけではない。用いられる社会

シグナルは種によって異なるものの、異種間を含めて、哺乳類に共通する絆形成メカニズムの存在を示すことは、とかく主観的に語られがちな母子関係を共通のものさしをもって客観的に評価し、議論できるようにするという意味で、非常に有意義だと考えている。

みつめあいの起源

冒頭のイヌたちは、親子で常と一緒に行動しており、イヌ同士のコミュニケーションが（よくも悪くも）活発である。しかし、親きょうだいで優しくみつめあうことはない。そもそも動物は「みつめあい」をしない。ヒトも含めて、動物にとって直視は威嚇を意味するからである。しかし、ヒトはみつめあいを親和のシグナルとしても使っている。他の動物と同様に、イヌにとっても直視は威嚇を意味するが、おそらく彼らはヒトに対しては「みつめあい」を使い分けられている。なぜイヌはそのような使い分けができるようになったのだろうか。

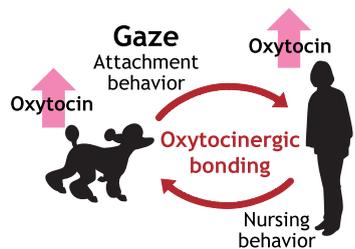


図1 ヒトとイヌとの視線とオキシトシンを介した絆形成の概念図

ヒトの目は、横長で白目（強膜）が目立つようになっている。霊長類の中で強膜に色素がなく白目になっているのはヒトだけであり、横長の程度も際立っている。樹上で暮らす種に比べて、地上で暮らす種のほうが目の横長度は大きいことから、水平方向での情報量を増やすための適応であるといわれている。また、白い強膜の露出が多いため、ヒトの視線方向は遠くからでも検知しやすくなっている。このような「何を見ているのかがわかりやすい」というヒトの目の形態は、ヒトの集団維持に関連しているらしい。霊長類では他個体との親和関係を維持するためにお互いにグルーミングをする。しかし、構成員数が多くなったヒト集団では、時間的にも物理的にも頻繁なグルーミングは難しい。そのため、グルーミングの代わりに、「視線」が意思疎通のシグナルとして活用されたという説がある（小林・橋彌，2005；ゲイズ・グルーミング仮説）。野生では避ける・隠すものであった視線が、ヒトでは積極的に交わす・表すものとなったことで、大きな集団を維持するための重要な機能を担うようになったのである。

イヌの視線コミュニケーション

一方、イヌが指差しなどのヒトの非言語コミュニケーションの理解に優れていることは、チンパンジーやオオカミとの比較研究で示されている。おそらく進化の過程でイヌが独自に獲得したものであろう。イヌの家畜化・進化の過程はいまだ不明ではあるが、ストレス応答システムの突然変異により、ストレスホルモンであるコルチゾールの分泌が抑制され、新奇刺激に対してある程度寛容になったことで、ヒトという異種を受け入れ、次第に意思疎通しやすい

「イヌ」になったという説がある（Hare & Tomasello, 2005）。コルチゾールの過剰分泌は認知や学習能力にも影響を与えるとされており、平たく言えば、イヌは「緩くて柔軟」になったために、ヒトのやり方を取り入れることができた、つまり、ヒトが感知しやすい視覚コミュニケーションを身につけたのである。もちろん、何も無いところから急にできるようになったわけではないだろう。上記の「ゲイズ・グルーミング」を活用する素地がイヌにあったと考えられる。イヌとオオカミの共通の祖先種は地上で暮らしており、おそらくオオカミと同様に、狩りや子育てを群れで協力して行っていたはずである。また、オオカミは明るい虹彩と黒い瞳孔のコントラストを利用して、仲間同士で視線をコミュニケーションに使っているらしい（Ueda et al., 2014）。つまり、イヌは野生種であった頃から、地上で、視線をコミュニケーションに利用しながら、集団で協力して暮らすというヒトと多くの共通点を持っていたのであろう。実は、イヌもオオカミも白い強膜を持っている。オオカミはあまり白目がみえないのに対して、ヒトへ要求があるときなど、イヌはかなりの頻度で白目を見せる（図2）。白目をのぞかせる上目遣いというテクニックを、イヌがいつ獲得したのかは不明であるが、少なくとも現在、私たちヒトとイヌとの「会話」の原動力となっていることは間違いない。

さいごに

以上、「みつめあい」に焦点をあてて、ヒトとイヌのコミュニケーションについて説明してきた。あくまで仮説ではあるが、ヒトとイヌとの間に多くの共通点があり、それが種を越えた強い結



図2 生後1ヵ月ですでに視線で訴えかけてくる

びつきを生み出しているといえる。忘れてはならないことは、イヌは彼ら自身の社会をもっていることである。家畜化の長い年月を経て、ヒトに有利な性質や特徴が選択され、現在の様々な品種もつイヌになったのは事実である。しかし、絆の形成や視線コミュニケーションのいずれも、もともと哺乳類が共通に持つシステムであり、イヌ科の野生動物が備えていたものである。ヒトはそれを利用したに過ぎない。イヌが持っている彼らの本来の世界に思いを馳せながら、末永く付き合っていきたいと思っている。

文 献

- Hare, B. & Tomasello, M. (2005) Human-like social skills in dogs? *Trends in Cognitive Sciences*, 9, 439-444.
- 小林洋美・橋彌和秀 (2005) 「コミュニケーション装置としての目：『グルーミング』する視線」遠藤利彦（編）『読む目・読まれる目：視線理解の進化と発達の心理学』東京大学出版会
- Nagasawa, M., et al. (2015) Oxytocin-gaze positive loop and the coevolution of human-dog bonds. *Science*, 348, 333-336.
- Ueda, S., et al. (2014) A comparison of facial color pattern and gazing behavior in canid species suggests gaze communication in gray wolves (*Canis lupus*). *PLoS ONE* 9 (6), e98217.

オウムの声まねから学べるもの

愛知大学文学部心理学科 教授
関 義正 (せき よしまさ)

Profile 一関 義正

千葉大学大学院自然科学研究科博士課程修了。理学博士。東京大学大学院総合文化研究科助教などを経て現職。専門は生物の音声コミュニケーション。著書は『行動生物学辞典』（分担執筆、東京化学同人）など。



オウム・インコの仲間は種類や個体にもよりますが、ヒトの発語を模倣して「おはよう」などと発声します。このことは古くから知られており、アリストテレスや清少納言による記述も残っています。このような、聴覚経験に基づいて後天的に発声パターンを獲得する能力を「発声学習能力」といいます。オウムの仲間はこの能力をヒトの発語の真似においてだけでなく、同種個体間のコミュニケーションにおいても用います。

ヒトは特殊な音でなければ、初めて聞く音でも難なく模倣できます。しかし、実のところ、発声学習には、その基盤となる神経機構と複雑な認知能力が必要です。ヒト以外の霊長類はヒトの発語を模倣しません。鳥類においては、オウム目やキュウカンチョウが属するスズメ目のトリの脳に発声学習を担う発達した神経回路がある一方、ハトなど多くのトリはそのような神経回路を持たず、ゆえに発声学習能力も持ちません。

では、なぜ一部の動物だけがそのような神経機構を進化させ、この能力を獲得したのでしょうか。有史前に起きたことですから、その答えを知ることは困難です。しかし、この謎に挑むために行われてきたヒトと他の動物の比較研究は、後天的に獲得される音声を使ったコミュニケーションの利点

を浮き彫りにしてきました。

コミュニケーションと発声学習能力

一例を挙げます。自分の家のイヌとほかのイヌの鳴き声を聞き分けられるように、発声学習能力のない動物についても、声による個体識別ができます。そうすると、それらの鳴き声は「名前」としても使えそうですが、実はそうとは限りません。例えば、発声学習能力を持たないある動物種がみな生まれつき、個体AもBも「ポー」という同じパターンで鳴くとします。すると、その声質からAとBを区別できるかもしれません。そこで、個体Cがこの鳴き声を名前のように使おうと考え（そもそも名前の概念がないかもしれないので、あくまで仮の話です）、Aを呼ぼうとして「ポー」と鳴くとします。しかし、AではなくBが応えてしまうかもしれません。これでは、この生得的な発声は名前の機能を果たせません。

一方で、ヒトは発声学習能力を持っていますから、「一郎」「二郎」と名乗り、三郎は「一郎」を名指して呼べます。つまり、発声学習に基づく音声による名付けは、コミュニケーションの幅を大きく広がります。オウムやインコの中には、個体それぞれが音響パターンの異なるコール（単発の声：図1）を後天的に獲得し、さらに、

他個体がそれを模倣する種もいません。そうすると、そのコールは、名前の機能の一部を担うかもしれません。私たちの研究室では、実験によりこの可能性を検討しています。

さて、名前を使うことは自他の区別に繋がります。これは自分の存在に注意を向けるきっかけになるかもしれません。そうすると、心理学の難問である「自己意識」の由来を探るには、名前、ひいては発声学習能力に着目できるかもしれません。私たちは自分自身が生きていること、何かを感じ考えることを認識でき（と思っています）。ヒト以外の動物にもこれと似た感覚があるのでしょうか。この疑問を解こうとすれば、その研究対象の最有力候補の一つはオウム・インコの仲間でしょう。

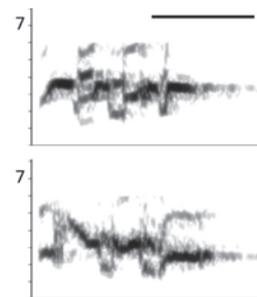


図1 セキセイインコの発声の例。上下はそれぞれ異なるトリのコール。縦軸は音高、横軸は時間、濃淡は音圧を表す（サウンドスペクトログラム）。縦軸の単位はkHz。右上の横棒の長さは100ミリ秒。

ヒトとのよい関係が促すオウム の発声模倣

オカメインコ（分類学的にはインコではなくオウム：写真1）は口笛のような声で音楽のメロディを真似るのが得意です（なお、ヒトの口笛は声帯運動を伴わないので発声ではありませんが、オカメインコの声は発声です）。私たちの研究室でも、手乗りとして育てた雛3羽がヒトによる口笛の演奏を真似るようになりました。さらに、ヒトの演奏が始まると途中からそれに加わり、タイミングを合わせて一緒にうたうようになりました。これには、メロディ全体を記憶し、聞いている音はその時間構造のどこに位置しているのかを判断し、次に出てくる音のタイミングを見計らって発声器官を運動させるという一連の複雑な認知過程を要します。これまでに、このような「ユニゾン」をうたうヒト以外の動物の報告はありません。この特異な行動を発現させたのは、ヒトとの間に築かれた強い社会関係かもしれません。

さて、同じ種でもヒトが発する音を真似るトリとそうでないトリがいます。その理由の一つは「絆の強さ」の違いにあるかもしれません。私たちの研究室では、ヒトとの親密な接触によるオカメインコのメソトシン（哺乳類のオキシトシンに対応）の分泌量の変化を測定しています。これにより、生



写真1 オカメインコ

物分類また進化の系統樹上では「綱」のレベルで異なるトリとヒトの間にも、ある種の温かな関係が成立することを物質の量で示せるかもしれません。

なお、米国にはAlexという有名なヨウム（中型インコ的一种）がいました。ベッバーバーグ博士は、長期にわたって築いた社会関係により、Alexに多数の英単語の音を模倣・使用させることに成功し、その認知について膨大な数の研究を発表しました。

発声以外の行動の模倣や同調によるコミュニケーション

オウム・インコは、他のトリにつられて体を動かすことがあります。インコ間であくびがうつるとい研究報告もあります。私たちの研究室では、ビデオ通話を介した状況でも、セキセイインコ間にそのような「行動伝染」が起こることを示しました (Ikkatai et al., 2016)。

また、ヒトがダンスを踊るように、音楽の拍に合わせてリズムカルに、また自発的に体を動かすオウムについての研究報告があります。このような行動はヒト以外にはあまり見られません。私たちの研究グループは、セキセイインコが定間隔のリズムに合わせて体を動かす一定程度の能力を持つことを示しました (Hasegawa et al., 2011 ;Seki & Tomyta, 2019)。なお、野生のヤシオウムは、道具を作り、それをリズムカルに打ち鳴らして、仲間の注意を引きます。これらを考え合わせると、オウム・インコの仲間は、リズムに敏感で、リズムカルな運動をコミュニケーションに利用する性質を共有しているのかもしれません。

このような行動の模倣・同調能力と発声学習能力との関係についてはよくわかっていません。しか

し、先述の神経回路の構造から、これらの能力の関連を検討している研究者もいます。模倣・同調は、コミュニケーションに密接に関わり、心理学の大きな研究テーマの一つです。この点でも、オウムやインコは優れた研究対象です。

おわりに

オウム・インコは社会性が高く、特に手乗りとして育てられたトリは、飼主との持続的な良い関係を必要とします。そのため、飼主は、毎日エサ・水をあげ、清潔にすることに加え、カゴから出して遊ぶなど、トリとの適切なコミュニケーションをとる必要があります。さもないと、トリに心的ストレスによる毛引きなどの望ましくない行動が生じます。

さらに、オウム・インコは長命で、50年以上生きるものもいます。ですから、安易な飼育は勧められません。ですが、決意と責任をもって世話することさえできれば、これだけ魅力的な伴侶動物、また研究対象はそうはいません。

文 献

- Hasegawa, A., Okanoya, K., Hasegawa, T., & Seki, Y. (2011) Rhythmic synchronization tapping to an audio-visual metronome in budgerigars. *Scientific Reports*, 1, 120.
- Ikkatai, Y., Okanoya, K., & Seki, Y. (2016) Observing real-time social interaction via telecommunication methods in budgerigars (*Melopsittacus undulatus*). *Behavioural Processes*, 128, 29-36.
- Seki, Y., & Tomyta, K. (2019) Effects of metronomic sounds on a self-paced tapping task in budgerigars and humans. *Current Zoology*, 65, 121-128.

イタリア

サトウタツヤ



立命館大学総合心理学部教授。今回は、少し古い歴史を扱える国としてイタリアをチョイス。今度は逆にあまりに厚い歴史があり、取捨選択が難しくなりましたが、最後にはマリア・モンテッソーリまでたどり着いた！ 学問が誕生する頃の関連分野の熱気を感じました。

近代心理学はドイツを中心に興隆したとされるが、同時に近隣諸国においても同様のムーブメントが起きていた。その学問的母体になったのは哲学であるが、イタリアにおいては19世紀中頃の人類学（形質人類学の流れをくむ人類学）が哲学に加えてイタリア心理学のゆりかごとなっていた。以下で見ていこう。

テイト・ヴィグノリは、心理学に関心を寄せた最初期の人類学者の一人である。19世紀後半、ダーウィンの進化論に影響を受け、動物の知能や行動について研究を行い、比較心理学の基盤を築いた。



T. Vignoli
(1824-1914)

ついで、ロベルト・アルディゴはイタリアの実証主義の代表的哲学者で、カトリックの司祭として活躍後、パドバ大学で哲学史を教えた。『実証的科学としての心理学』（1870）を著し、それまでの心理学がもっていたスピリチュアル哲学的な枠組みを批判した。心理学は魂を対象とするのではなく精神過程を対象とすべきであり、また、その方法としてドイツで発達しつつある心理生理学の方法を取り入れるべきだと主張した。また、彼は感覚こそが精神過程の始まりであり、かつ、複数の感覚の連合が精神過程を作ると考えており、その意味でイギリス連合主義の影響を受けていたとも言え

る。また、1876年という早い時期から、彼は高等学校レベルや大学レベルでの心理学実験室が有用であるという主張もしていた。ただし、彼自身が心理学的な研究を行ったわけではなかった。



R. Ardigò
(1828-1920)

人類学の立場から心理学を推進したのがジュゼッペ・セルギである。シシリアに生まれ、メジナ大学で法学を学んだ後、高等学校で哲学を教えるようになった。進化論的実証主義に関心をもったセルギは、イギリスの進化論的社会学者・スペンサー（Herbert Spencer）の著作をイタリア語に翻訳していた。セルギはスペンサーの影響を受けて精神活動は生理学的基礎をもち、生理学的手法によってこそ研究できると考えていた。彼は『実験科学に基づく心理学の原理』を1873～74年に刊行するなど、哲学において心理学を講じることに興味をもっていた。また、メジナ大学ではイタリアで初めての心理学の科目を開いた。人類学者としても名高いセルギはローマ大学に移ってからは人類学の科目の補助として心理学の科目を開講した。1897には『隔週刊 医師と法律家のための心理学・精神医学・神経病理学レビュー』という雑誌を刊行した。この雑誌はイタリアにおいて初めて「心理学」がタイトルに入った

ものであったが、長続きしなかった。1905年の第5回国際心理学会においては、大会長を務めた。

セルギは子どもを対象にした人類学的研究を行っていた。個々の子どもについての形質的なデータをとったうえで類型化して子どもの発達や教育を考えたことから、教育人類学的アプローチとも呼ばれる。



G. Sergi
(1841-1936)

そのセルギに影響を受けたのがマリア・モンテッソーリである。女性差別が残る中1896年イタリアで初めての女性医師となったモンテッソーリは、セルギのほか犯罪人類学の祖であるロンブローゾや精神遅滞児研究の泰斗であるフランスのセガンの影響も受けて、子どもを多角的に調査する子ども調査票を開発した。彼女の研究は1899年イタリア初の国立特殊児童学校でなされ、感覚を重視する教具を開発することになる。彼女はローマ大学哲学科に再入学し教育学や実験心理学を学んだ。また、1904～07年までローマ大学で教育人類学の講義を行ったが、それはセルギの推薦であった。



M. Montessori
(1870-1952)



高校生が心理学に 魅力を感じる授業とは？

別府大学文学部人間関係学科 教授
矢島潤平 (やじま じゅんぺい)

最近、高大連携の推進に伴い、大学教員が、高校生に出前授業や進路セミナー説明会を行う機会が増えています。大抵は、これから進路を決めようとしている1、2年生が対象になります。私も年に5回ほど高校に出向いていますが、当然ながら心理学に限らず様々な分野の教員（専門学校や自衛隊の方など大学以外の関係者も）が参加していますので、他の分野より心理学に少しでも多くの高校生に興味を持ってもらいたい思いで話しています。今回は、高校での出前授業の一端を紹介させていただきます。

高校生に対する出前授業の目的

私が授業をするにあたって、一番心がけていることは、一人でも多くの高校生が心理関係の学部に進学したいと思ってもらえるような話題を提供することです。特に、本年度より公認心理師の養成が始まったこともあり、例年より高い関心を持っている高校生も多く、少し追い風になっています。インターネットで公認心理師のことを調べて、具体的な質問をする高校生も少なくありません。質問に対しては、適切かつ理解しやすいように話を工夫する必要があります。出前授業は、50分間と大学の講義より短くなっています。そのため私は、具体的にイメージしやすく、そして高校生が参加しやすい楽しい授業を目指しています。

高校生は心理学をどう捉えているか

最初に、「心理学って、どんな勉強をしますか？」と質問すると、「カウンセリング」や「心を研究する」という声が圧倒的です。多くの高校生は、「心理学」イコール「カウンセリング」と思っているようで、漠然とカウンセ

ラーになりたいと考えているようです。大分県は、震災や北部九州水害などに遭遇したこともあって、「こころのケア」に注目されていることも一因かもしれません。高校には、スクールカウンセラーが配置されており、実際にカウンセラーと接する機会もありますが、仕事内容までは詳しく知らないようです。身近なカウンセラーがどんな仕事をしているかなど雑談で触れると興味を持って授業に参加してもらえます。

卒業後の進路と、取得できる資格の説明

高校生と保護者は、心理学を学んだ後の進路に興味を持っています。給料は？勤務形態は？など様々なことを知りたがっています。なので、授業の初めのほうで、本学大学院を修了して病院で臨床心理士として勤務している修了生の仕事の内容を紹介します。例えば、外来患者への心理面接や発達支援、鑑別診断補助としての心理検査、精神科デイケア、アウトリーチなどを挙げて丁寧に説明します。事前に修了生に「大学の時に特に勉強したこと」などを聞いておき、生の声を高校生に届けるようにしています。

心理学を学んで取得できる資格の説明も必須です。学部4年で認定心理士を取得でき、大学院2年で臨床心理士や公認心理師の受験資格を

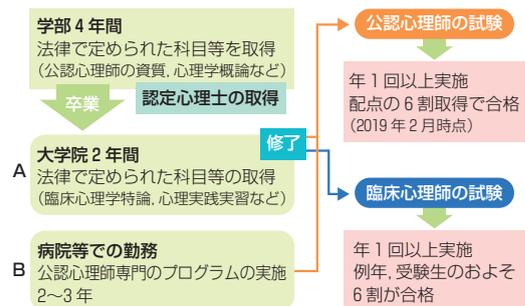


図1 心理学の資格取得の説明スライド



Profile—矢島潤平

久留米大学大学院比較文化研究科後期博士課程満期退学。臨床心理士、公認心理師、指導健康心理士。別府大学大学院文学研究科臨床心理学専攻教授、別府大学臨床心理相談室室長、大分県臨床心理士会副会長、大分県DPAT運営委員会委員を兼任。専門は臨床心理学、精神神経内分泌免疫学。著書は『健康のための心理学』（分担執筆、保育出版社）、『ストレス科学事典』（分担執筆、実務教育出版）など。

得られることや資格試験についても簡単に触れるようにしています（図1）。

第一印象は楽しく

授業の第一印象は、科目に関係なく大切です。高校生の気持ちをつかむための題材を何にするかは本当に悩みます。幸いにして心理学には、パブロフの犬、つり橋研究、監獄実験など多くの有名な研究があります。これらは、メディアや映画等で取り上げられ、高校生も知っていることが多いです。私はよく、「だまし絵」を使います。ルビンの壺など様々な図を提示して、「何に見えますか？」と質問して、参加してもらいます。終わりにちょっとだけもってもらしく「図と地」の説明をしますが、何より体験を重要視しています。ちなみに、図と地の説明には、スマホの写真を加工するときの機能を使うと注目してもらえます。

カウンセラーの仕事、事例紹介をする

前述したとおり、高校生はカウンセリングに興味を持っているため、このテーマは必須です。はじめに、カウンセラーはクライアントの悩みに直ぐアドバイスするのではなく、親身話を聞き（傾聴）、否定しない（受容）ことが基本的態度であることを説明します。以下は授業の抜粋です。

クライアントはカウンセラーに出会うまでに、友だちなどから色々なアドバイスをもらって困っています。困っている人にあれこれアドバイスするとどうなるでしょう？もっと困ってしまいます。どんな話でもじっくり聞いてくれると、皆さんも安心しますよね。このように信頼関係ができて、カウンセリングが成立するのです。……

次に、架空事例「犬が怖い人」をとりあげて、認知行動療法的な関わりを紹介します。カウンセリングによって、考え方の視点を少し変えることで不安を取り除くことができると説明をした上で（図2：実際はこんなに簡単ではありませんが……）、以下のように事例を紹介します。

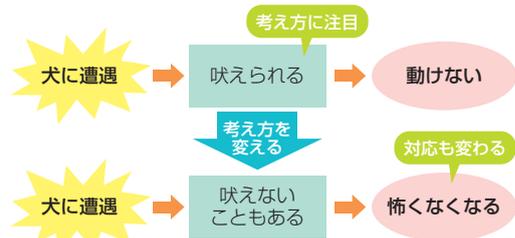


図2 事例紹介スライド

相談内容：幼い頃に犬に吠えられた。それ以来、犬に吠えられると思って近づけない。
カウンセリング：かわいい小型犬を連れてきて、吠えないという経験をしてもらう。つまり、「吠える犬が怖いだけで、必ずしも犬は怖いわけではない」ということを理解してもらう。

まとめ

高校生に心理学の授業を行う私の流れを紹介しました。心理学のいいところ取りの授業で批判を受けそうですが、再度強調したいことは、私が考える出前授業の目的は、高校生に心理学に興味を持つきっかけ作りです。心理学の本質は、大学入学後に十分教示できます。限られた時間の中で、身近な心理学、面白い心理学など高校生が興味を持ってもらえる内容を授業に取り入れて、進学してもらうきっかけになればと切に願っています。

ハダカデバネズミという動物がいます。哺乳類のくせにアリやハチみたいに女王や兵隊や働きネズミがいるという奇妙な動物で、その存在を知ったのは20世紀末のことでした。手に入る情報といえば教科書のモノクロ写真くらいのもので、そこから色や大きさ、重さ、動き、声を想像して身悶えたものです(大げさ)。それが今やどうですか。検索すればあつというまに数多の記事と写真、そして動画までが見られるのです。インターネット万歳。

何の話かというご質問の件です。楽しいから笑うのか、笑うから楽しくなるのかって問題は、かのウィリアム・ジェームズも取り上げた19世紀から続く一大テーマでして、近年は「顔面フィードバック仮説」って形で検討されてきました。唇に触れないようにペンを歯で咥えると、ニッと笑った「笑顔」の形になる。その状態で漫画を見ると面白さが倍増する*という研究が有名ですね(Strack et al., 1988)。20世紀の心理学界の重要な仕事の一つといえるでしょう。

しかし時代は21世紀。「未来予知は、できます! (Bem, 2011)」なんて論文を業界のトップジャーナルが掲載してしまったものですから大騒ぎになって、「教科書に載ってるアレもアレも本当はアレなんじゃ」みたいな疑心暗鬼が心理学界を跳梁跋扈するようになってしまい、そのとばっちり……という語弊があり過ぎですが、顔面フィードバックも追試しようと話が盛り上がります。現代の追試は徹底していて、十分な数の参加者(>1000人)を集めてガッツリやる。となると一つの研究室では到底無理だから、17ラボが共同でやる。手続きを万全にすべく元論文の著者含め専門家に意見もきく。結果にかかわらずちゃんと公表されるよう雑誌から事前に掲載許可も取りつける。お祭りのようなビッグプロジェクトの成果が発表されたのが2016年で、結果はネガティブでした(Wagenmakersら, 2016)。形だけ笑顔を作っても楽しくなることはない。なんだそれ笑

えない。当時はがっかりきたものです。

ところが世の中には「まだまだ終わらんよ」と考えた人たちもいて、敵対的チームによる共同研究に乗り出しました。仮説に支持的な人たちと、懐疑的な人たちが、一緒にアイデアを出し合って研究プランを立てたんですね。これなら結果を見てからの後出しジャンケン的な誹謗中傷が避けられます。共同研究は今まさに進行中で、2019年1月に予備実験の結果が報告されました。今のところポジティブ。顔面フィードバックは効くかも(Colesら, 2019)。おお。

インターネットの存在がこれらの共同研究を強く後押ししたことは間違いのないでしょう。加えてこれら研究の詳細はネット上で公開されていて、通信環境と読解力さえあれば、誰でも楽しめます。追試論文は誰でもダウンロードできるオープンアクセスですし(そうでない論文も世の中には多いのです)、敵対的共同研究の報告はPsyarxivという原稿共有サービスで公開されています。素晴らしい。読んでみると研究者の悲喜こもごもが行間どころか行そのものからビシビシ伝わってきて一読の価値あります。最も涙を誘うのが追試論文におけるランカスター大学はLynottさんラボの記述でしょうか。目標である200名のデータを集めるべく奮闘したものの、洪水と停電で大学が閉鎖されちゃって158名しか集められなかったという告白が書かれていてですね。そんな時でも笑顔を忘れないことが大事。と言えるのかどうか、敵対的共同研究の本実験が楽しみです。

*すみません、盛りました。Cohenの d で0.82です。



Profile — 平石 界

東京大学大学院総合文化研究科博士課程退学。東京大学、京都大学、安田女子大学を経て、2015年4月より現職。博士(学術)。専門は進化心理学。

研究倫理・出版倫理

皆さんこんにちは。編集担当常務理事の宮谷です。お手元に *Japanese Psychological Research* (JPR) の Vol. 61, No.1が届いていることと思います。各論文の中に、“Conflict of Interest” という見出しがあるのにお気づきでしょうか。私がこの仕事を担当させていただいたのは2015年6月ですが、この4年足らずの間に、研究倫理や出版倫理に関して、さまざまな動きがありました。

もちろん、COI (利益相反) というのは、特に目新しい言葉ではなく、日本心理学会でも投稿時に提出していただく倫理チェックリストの中に、「企業などと共同研究を実施、あるいは企業などからの助成を受けましたか」という項目を設けていますし、該当する場合にはその内容を脚注として記載いただいています。しかし、心理学に対する社会からの期待、要請が強まり、また企業等の資金による共同研究を実施する機会が非常に多くなってきた現状では、COIについて今まで以上に注意深く扱う必要があります。上記の JPR の変更もそれに対応した動きの一つであり、該当しない場合でもそのことを明記するようにしました。

また、最近『心理学研究』や JPR の編集委員会で、ヘルシンキ宣言が話題となりました。ヘルシンキ宣言は、もともと医学研究の倫理的原則として1964年6月に定められましたが、医学のみならず、人間を対象とする研究を行う多くの機関や施設で、ヘルシンキ宣言を基に研究倫理委員会の設置等が行われてきました。

ヘルシンキ宣言は、何度か改訂が行われています。最新の2013年10月の改訂版では、「研究登録と結果の刊行および普及」に関して、「35. 人間を対象とするすべての研究は、最初の被験者を募集する前に一般的にアクセス可能なデータベースに登録されなければならない。」(日本医師会訳版、原文は Every research study involving human subjects must be registered in a publicly accessible database before recruitment of the first subject.) とあります。

これを文字通りに読むと、論文の中で「ヘルシンキ宣言に則り」と書くためには、研究の事前登録が必要となります。序文には、「本宣言

は全体として解釈されることを意図したものであり、各項目は他のすべての関連項目を考慮に入れて適用されるべきである」と書かれており、「ヘルシンキ宣言の精神に則り」のような書き方をしている論文もあるので、必ずしも文字通りの解釈をしなくても良いのかもしれませんが、いずれにせよ研究倫理や出版倫理が時代とともに変化(というよりも厳格化でしょうか)していることは間違いありません。私の勤める大学では、博士論文や修士論文はもちろんのこと、卒業論文についても、研究倫理に関する講習を受けていないと、提出できなくなりました。ちなみに、多くの学生は、一般財団法人公正研究推進協会が提供する CITI Japan e-learning プログラム(2018年10月1日から eAPRIN に名称変更)を受講しているようです。

『心理学研究』88巻5号の「性犯罪者の犯行の否認・責任の最小化と再犯との関連の検討」や、同87巻3号の「ゴミのポイ捨てに対する監視カメラ・先行ゴミ・景観・看板の効果」など、機関誌で発表される論文に、社会における具体的な課題の解決に直結することを目指した内容のものが随分増えてきた印象があります。社会との繋がりが強くなればなるほど、心理学が果たす役割と同時に責任も大きくなります。本誌でも68号(2015年1月15日発行)の特集「その心理学信じていいですか?」で、再現可能性の問題など心理学研究の在り方に関する提言が行われていますが、成果の活用も含めて、個々の研究の倫理的側面については、今まで以上に強く意識する必要があると考えられます。

日本心理学会では、研究と発表における倫理、社会における職務上の倫理などに関して規程を定めています(https://psych.or.jp/publication/rinri_kitei/ 第3版)が、学界をとりまく環境は常に変化しています。機関誌に投稿いただく皆さんはもちろんですが、そうでない方も、今一度このような状況を認識していただき、特に、研究倫理・出版倫理について敏感になっていただければ、と強く願っております。

(編集担当常務理事・広島大学教授 宮谷真人)

こころの 測り方

サンプルサイズの決め方

専修大学人間科学部心理学科 教授

大久保街亜（おおくほ まちあ）

参加者や被験体の数、つまりサンプルサイズを皆さんはどのように決めていますか？ サンプルサイズは、実証科学である心理学に必ずついて回る問題です。最近、重要性が再認識されています。実際、サンプルサイズを事前に正確に決めることは、研究の信頼性、妥当性、そして再現可能性を担保するために欠かせません。そして、サンプルサイズを事前に決めず、なんとなくデータを取り足す、あるいは、途中で取るのをやめることは、研究における不正行為として認識されるようになってきました。この認識がないなら、あなたは知らないうちに不正を行っているかもしれません。

メンデルの法則

サンプルサイズと不正行為についてある逸話があります。メンデルの法則は、中学校の理科で教えられる有名な法則です。メンデルは修道院で日々エンドウをまき、膨大なデータを集めてこの法則を導きました。ご存知の方もいるかもしれませんが、メンデルのデータには様々な疑問や批判があり、不正が疑われてきたのです。

例えば、現代統計学の父、R・A・フィッシャーは、メンデルのデータを再分析し、奇跡に近いレベルでデータが理論的な期待値に一致することを指摘しました。この結果が偶然に得られるチャンスが1/30000と著しく低いことから、データが故意に操作された可能性を指摘しました（Fisher, 1936）。

このような奇跡のデータが得られたのでしょうか。現代では、メンデルは自分の考える法則に一致

するデータが得られたところでエンドウ豆を数えるのをやめたと言われています。なるほど、それなら期待値とぴったり一致するはずです。メンデルは不正をする意図もなかったでしょうし、当時はそのような認識もありませんでした。しかし、現代でこのような行為は、データの加工と同じ不正行為になるのです。

Simmonsたちのコンピュータ・シミュレーション

データを分析して有意差が得られなかったとき、参加者を足した経験を持つ人は多いと思います。John, Loewenstein, & Prelec (2012) によれば、およそ7割の研究者にこの経験があるそうです。しかも、これを問題だと認識している人は、調査当時、ほとんどいませんでした。読者の中にも、同じように何が問題なのか判然としない人もいるでしょう。

なんとなくデータを取り足したり、取るのをやめたりすることが、なぜ不正につながるのでしょうか？ Simmonsたちは、そのようなことをしてきた人々を震え上がらせるコンピュータ・シミュレーションを発表しました。彼らはデータセットからランダムにデータを取り出して、二つの条件に振り分けました。ランダムに取り出しているのも、当然、二つの条件に差はありません。しかし、差がないはずのデータセットでもデータの取得ごとに（例、一人の参加者のデータが得られたごとに）検定を行うと、22%のケースで有意な結果が得られたのです（Simmons, Nelson & Simonsohn,

2011）。これは全く差がないデータでも、検定を繰り返せば、有意な結果が得られてしまうことを示しています。

検定を繰り返してはならない。これは推測統計の基本です。検定を繰り返せば、実質的な有意水準が上昇し、本当は差がないのに差があるという確率が増加します。結果として、誤った検定結果が導かれてしまうのです。

なんとなくデータを取り足すような研究における問題のある習慣はQuestionable Research Practices, 頭文字をとって、QRPsと呼ばれます。このような習慣は改めなくてははいけません。QRPsについて日本語で読めるものでは平石・池田（2015）があるので、気になる方はそちらをご覧ください。

サンプルサイズを事前に正確に決める。データの取り足しや、途中でやめることを防ぐには、これが重要です。事前に何人の参加者のデータを取るのか正確に決まっているなら、データの取り足しや途中での打ち切りは生じません。

大きすぎるサンプルサイズ・ 小さすぎるサンプルサイズ

「大は小を兼ねる」ということわざがあります。しかし、心理学では、単純にサンプルサイズが大きければよいわけではありません。まず、データをとるための実験や調査は、参加者の負担になります。過度に多くデータを集めることは参加者に不要な負担をおわせていることになり、倫理的に問題があります。また、研究者も無駄な時間や労力を割くことになり

ます。加えて、帰無仮説検定を行う場合、サンプルサイズが大きいと取るに足らない差や効果が有意になってしまいます。これは帰無仮説検定が、サンプルサイズが大きいほど有意になりやすい性質を持っているからです。例えば、相関係数で $r = .01$ という、実質、無相関に近いようなデータについて考えてみましょう。もし、サンプルサイズが50、例えば、50人の参加者からデータを取ったのなら、この相関は有意になりません ($p = .95$)。ところが、同じ $r = .01$ でもサンプルサイズが50000なら、 $p < .05$ で有意になるのです。もちろんこのような場合でも、相関係数の値そのものに注目すれば、実質的に無相関であることがわかります。しかし、帰無仮説検定をすると、有意か否かだけが一人歩きして、効果の大きさが無視されることがしばしばあります。そして、実質は無相関にもかかわらず、有意な相関があったと検定の結果だけが、喧伝されることがあるのです。

小さすぎるサンプルサイズにも問題があります。帰無仮説検定が、サンプルサイズが大きいほど有意になりやすい性質がある以上、サンプルサイズが少ないと有意である結果を、有意でないと判断することになってしまいます。結果として、重要な知見を発見しそこなうことになるかもしれません。大きすぎたり、小さすぎたりするサンプルサイズの問題については、大久保・岡田(2012)に詳しく書きました。そちらもご覧ください。

検定力を使った決め方

サンプルサイズを事前に正確に決めると、不正を防ぐことにつながります。では、どのように決めたらいいのでしょうか？適切なサンプルサイズは、調べたい現象

や効果の大きさによって異なります。強い効果なら、比較的小さなサンプルサイズでも良いですが、弱い効果ならサンプルサイズを大きくしなくてはなりません。

サンプルサイズの決め方にはいくつか種類があります。帰無仮説検定を行う場合、心理学では、検定力を基準にすることが一般的です。検定力とは、本当に差があるとき、きちんと差があると判断できる確率です。ですから、検定力に基づくサンプルサイズは、本当に差があるときに、きちんと差があると判断できるだけの数となります。

ここで検定力について復習をしておきましょう。統計的な判断には、2種類の誤りが生ずる可能性があります。ひとつは、第1種の誤りで、本当は差がないのにあると判断する誤りです。 α と呼びます。帰無仮説検定ではいわゆる p 値がそれにあたります。もうひとつは、第2種の誤りで、本当は差があるのに差がないと判断する誤りです。 β と呼びます。検定力は、この第2種の誤りと強く関係し、定義としては、全体の確率から第2種の誤りの確率を引いたもの、つまり、 $1 - \beta$ となります。

検定力に基づくサンプルサイズの決定では、検定力が.80になるようにすることが一般的です。これは本当に差があるなら8割は検出できるサイズということです。検定力、有意水準(通常は.05)、効果量、サンプルサイズは互いに影響をし、これら四つのうち三つが決まると残りの一つは自動的に決まります。ですから、サンプルサイズを決めるには、検定力、有意水準、効果量を先に決めなくてはなりません。検定力と有意水準は慣習に従ってそれぞれ.80と.05に設定することが多いです。効果量は先行研究などを参考におお

よその値を決めます。これらを元に計算を行うと適切なサンプルサイズを求められます。計算は、G*PowerやRなどのフリーソフトを使うと簡単です。ただし、測定する変数や検定の手法などによって求め方の詳細は異なります。実施にあたっては村井・橋本(2017)や大久保・岡田(2012)を参考にしてください。これらの書籍を参考にサンプルサイズを事前に正確に決め、研究の信頼性、妥当性、そして再現可能性を高めていきましょう。

文 献

- Fisher, R. A. (1936) Has Mendel's work been rediscovered? *Annals of Science*, 1, 115-137.
- 平石界・池田功毅(2015) 心理学な心理学研究: Questionable Research Practice. 心理学ワールド, 68, 5-8.
- John, L. K., Loewenstein, G., & Prelec, D. (2012) Measuring the prevalence of questionable research practices with incentives for truth telling. *Psychological science*, 23, 524-532.
- 村井潤一郎・橋本貴充(2017)『心理学のためのサンプルサイズ設計入門』講談社
- 大久保街亜・岡田謙介(2012)『伝えるための心理統計: 効果量・信頼区間・検定力』勁草書房
- Simmons, J. P., Nelson, L. D., & Simonsohn, U. (2011) False-positive psychology: Undisclosed flexibility in data collection and analysis allows presenting anything as significant. *Psychological science*, 22, 1359-1366.

Profile — 大久保街亜

2002年、東京大学大学院人文社会科学系研究科博士課程修了。2014年より現職。専門は認知心理学。著書は『伝えるための心理統計』(共著、勁草書房)など。



この人を たずねて

名古屋大学大学院情報学研究所 准教授

石井敬子氏

インタビュー
二村郁美



Profile—いしい けいこ

2003年、京都大学大学院人間・環境学
研究科博士課程修了。博士（人間・環境
学）。専門は社会心理学、文化心理学。
著書は『名誉と暴力：アメリカ南部の
文化と心理』（共編訳、北大路書房）、
『文化と実践：心の本質的社会性を問
う』（分担執筆、新曜社）、『つながれない
社会』（共著、ナカニシヤ出版）など。

■石井先生へのインタビュー

—ご研究のテーマの全体像につ
いてお聞かせください。

文化心理学の中でも、特に認知
と感情の認識の文化差に興味があ
ります。全体的な関心としては、
どうしてももの見方とか感じ方に
文化差が生まれるのか、なぜ文化
が存在しているのか、ということ
です。文化とか社会も人が作り上
げているものなので、人と文化と
社会のインタラクションがすごく
重要になってきますから、そこに
関して少し違った切り込み方をし
たいと思っています。一つは、文
化と心のインタラクションについ
て、遺伝子多型に着目した研究を
しています。もう一つは、全然違
う方向から、でも「文化の維持」
という観点から、ある文化の人た
ちが作り上げた文化的産物が、人
から人に伝達される時に、どうい
う情報が残ってどういう情報が消
えていくのか、どう意味が変わっ
ていくのかに関する研究もしてい
ます。いずれにしても、大きく見
ていくと、人のインタラクション

からできる文化というのがなぜ成
り立っているのかを明らかにした
いというのが最近の研究動機で
す。

—これまで取り組まれてきたご
研究は、具体的にどのような内容
だったのでしょうか。

大学院生のころから取り組んで
きたのは、感情の発話の理解の話
です。日本人は、敬語に気をつけ
たり、場の空気を読んだり、色々
と気をつけなければいけないこと
がたくさんあるハイコンテクスト
の文化ですけど、アメリカとか
英語圏の文化はローコンテクスト
なんですよ。そういうコミュニ
ケーションスタイルの違いが、私
たちが発話を理解する時にどう影
響するのかということを、日米比
較を通して検討してきました。

また、文化といった時に、日本
とアメリカという二分法的に分け
ちゃうとわかりやすくいいんで
ですけど、一体、文化の何が影響
を与えているのかということ考
える時には、日本の中での違い
っていいヒントになると思うん
ですよ。私は京都大学を出て、初め

就職したのが北海道大学だった
んですけど、北大でデータをとっ
てみたら、京大で実施した時と全
然結果が違うんですね。北大の
パターンがすごくアメリカ人的な
んです。北海道って開拓の歴史が
あって、アメリカも移住の歴史を
持っているところですし、それが
個人主義と関連している可能性
がありますよね。日本とかアメリカ
とかの文化比較だけじゃなくて、
文化内比較とか、文化の何が文
化差を生んでいるのだろうとい
うことも研究してきました。

—文化というテーマに関心をも
たれたそもそものきっかけとは。

文化に興味を持つようになった
のも本当にたまたまなんです。
そもそも私、大学に入った時も心
理学をやるつもりは全然なくて、
学部も実は農学部だったんです。
それで、たまたま大学でとったの
が、結果的には指導教官になる北
山忍先生の授業だったんですけど、
驚きの連続でした。当たり前
だと思っていたことがどうも全然
当たり前ではないってということが
衝撃的で。たとえば逸話レベルで
すけど、エスキモー（イヌイット）
とか、雪に関していくつも言語が
あるって話があるじゃないで
すか。ああいうのも、知った時
にはほんまかいなって思って、そ
んなに違ったらたまたまのもの
じゃない、文化っていうのはそん
なに影響あるのかって感じまし
た。あとは、実際に色々研究をや
ってみて、いかに自分が日本文化
にがんじがらめになっているかを
いろんな時に感じて、自分を含
めて、人の行動原理とか心の働
きを探るうえで、どうも無視で
きないものが文化にはあるんじ
ゃないのかなって感じました。そ
ういうところから、文化に注目
した、人とは何かっていう研究
ができたらなあと思ったのが出
発点です。



——自分自身も文化の中で生きて
いると、自分を相対化して、自分の
当たり前を疑うことって難しい
のではないと思うのですが、先生
はどのように研究テーマを見つ
けていらっしゃるのでしょうか。

難しいですね、私自身が知り
たいところです。一つは、心理学
だとだいたいアメリカ人を対象と
した論文ばかりなので、そういう
ものを読んで、これは直感的に合
わないなというところから始める
場合もあります。あとは、共同研
究者と議論しているところから出
てくることも多いですね。共同
研究者が海外にもいるので、違っ
たバックグラウンドの人との対
話ってというのが、そういうのを
気づかせてくれるうえでは重要に
なってくるのかなと思います。

——文化を研究するときの難しさ
や工夫があれば教えてください。

やっぱり言語のハンデもある
し、こっちが思っていることは
向こうにはなかなか伝わらない
ので、結局わかりやすい実験を
するっていうのに尽きるんですよ
ね。あんまり凝った実験をやら
ないとこけるというのか、相手に
理解してもらえないというのかな。
本当に単純な実験デザインを使っ
て、課題も非常に簡単にして、そ
ういうところで勝負していくとい
うのか、それでうまく文化差を見
つけられるといいなというところ
は常々考えています。

——これからどのような研究に
取り組もうと考えていらっしゃい
ますか。

遺伝子多型と文化の関係につ
いては、いくつかのことが明らか
になってきていますが、あまりに
散発的で、ある遺伝子多型を扱
っている研究では他の遺伝子多
型について見ていないんですね。
なので、遺伝子多型についてで
きるだけ網羅的に調べる研究を
今やって

いて、これから4～5年はかか
りそうです。過去の結果が追認
できるのかとか、これまでにわ
かっていない遺伝子多型と文化
差の関連があるのかとかにつ
いて、系統立てて、サンプルサイ
ズも大きくしたうえで検討して
います。

——最後に若手研究者に向けた
メッセージをお願いします。

うまくいかないことがほとんど
じゃないですか。だから一つだ
めでも落ち込まないで、いくつ
かオプションを持っておくよう
にして、どれかは当たるように
心掛けていくのがいいんじゃない
かなって思いますね。あと、英
語で書くことは重要だと思います。
英語で論文を書くと、自分の研
究をいろんな人知ってもらえる
可能性が高まって、新しい人と
一緒に仕事ができて、また成果
につながっていくので、リジェ
クトされてもめげずに色々出し
ていくのが重要じゃないかなと
思いますね。

■インタビューの自己紹介

インタビューを終えて

今回、石井先生にお話を伺い、
文化心理学の多様な視点の切り
口を教えていただき、そのおもし
ろさと奥深さにとても心惹かれ
ました。これまでに取り組まれて
きた幅広いご研究内容や最新の
研究知見など、伺ったお話はど
れも興味深いものばかりでした。
また、石井先生は、私の研究テ
ーマについても聞いてくださり、
質問にお答

えいただく際にも、私の関心と
関連する内容を取り上げながら
お話しくださいました。誌面の
都合上、記載することができな
かったのですが、石井先生が実
施された、子どもを対象とした
ご研究についてのお話は、特に
興味深く、題材や指標の設定の
仕方など、とても勉強になりました。
石井先生のお話を伺って、私も
自分自身のテーマについて、比
較文化的な視点を取り入れた研
究を行いたい、という気持ちが
より一層強くなりました。

現在の研究テーマ

私は、向社会的行動に関する
認知の発達の変化について研
究しています。向社会的行動は
基本的にポジティブに評価され
るものと考えられていますが、
実際には、背景にある文脈に
応じて、大きく異なる形で認
知されます。また、その認知の
仕方は発達のにも大きく変化
します。様々な文脈の中で生
じる向社会的行動を、人びとが
どのように認知し、その認知の
あり方が発達とともにどのよ
うに変化するのかについて明
らかにしたいと考えています。

拙筆ではありますが、今回
インタビューをさせていただい
て強く感じた、石井先生の温
かいお人柄と、文化心理学の
魅力について、少しでもお伝え
できていれば幸いです。このよ
うな貴重な機会をいただき、
本当にありがとうございます。



Profile—ふたむら いくみ

名古屋大学大学院教育発達科学研究科博士後期
課程 (2019年3月末まで)。博士 (心理学)。同年
4月より、東京大学大学院教育学研究科教育学研
究員。専門は発達心理学。論文は、Age-related
differences in judgments of reciprocal and
unilateral prosocial behaviors (共著, *Journal of
Experimental Child Psychology*) など。



福岡女学院大学

人間関係学部子ども発達学科

坂田和子 (さかた かずこ)

所在地：福岡市南区日佐 3-42-1

<https://www.fukujo.ac.jp/university/>

Profile 一坂田和子

福岡女学院大学人間関係学部子ども発達学科・大学院人文科学研究科発達教育学専攻教授。専門は発達心理学。著書は『教育心理学（教職エクササイズ）』（分担執筆、ミネルヴァ書房）など。



はじめに

福岡女学院は1885年、米国人女性宣教師ジェニー・ギールにより、福岡初の女子専門の教育機関英和女学校として創設されました。1921年に制服として採用したセーラー服は、諸説ある発祥元の一つとして名前が挙げられます。

現在本学院は、幼稚園、中学校、高等学校、大学（3学部・短期大学部）、看護大学、大学院を擁し、キリスト教主義に基づいた女子教育を行う総合学院として、134周年を迎えます。看護大学以外は、全て福岡市南区の日佐キャンパス内にあります。「改革と伝統が共存する福岡女学院——地域貢献を大切に学院」を2018年学院年間目標に、大学は「つながり」を重要なビジョンに掲げています。



写真1 本学 日佐キャンパス

大人間関係学部

1999年に開設した人間関係学部は、心理学科と子ども発達学科で構成されています。心理学科は臨床心理士や公認心理師の受験資格取得をはじめ、心理学の幅広い学びとそれによる社会貢献を志向しています。他方、子ども発達学科は、保育士・幼稚園教諭・小学校

教諭・特別支援学校教諭養成を目的とし、主に教育や福祉の場などで地域に貢献しています。本学部では、人としての在り方を「こころ」と「子ども」の視点から見つめ、人との触れあいやつながりを大切に、人と社会について幅広く学びます。自分らしさを活かしつつ、社会や周りの人を支える人として、生涯を通じて豊かに成長し続けていくことができる存在へ。「共に喜びをもって生きる」ことを、さまざまな角度から学びます。いずれの学科も心理学をベースとした教育課程になっています。

心理学科

心理学科では、心理的問題について理解・対処する力を育む「臨床心理」、企業・組織に関わる人間の心理を学び、自身のキャリア形成につなげる「キャリア心理」、他者と関わる力を磨く「人間関係」の3コースが用意され1学年100名の学生たちが学んでいます。

心理学科の特長の一つは実践的な学びです。1年次の『心理学プロジェクト演習』では都市銀行や航空会社と連携し、実社会での課題とその解決策を分析し、企業に直接提言します。入学後すぐに実社会で必要な技能に直に触れ、高い就業意識をもって2年次以降の学びと自身のキャリア形成に臨めるよう、注力しています。3年次の『フィールドワーク（臨床）』では、保健医療、福祉、教育の3分野の施設をフィールドとし、専門家の指

導の下で「チームアプローチ」と呼ばれる支援法を実践しています。このような実習を通して、一年次前期の『臨床心理学概論』から学び続けた臨床心理学の知識を実践的な技能へと昇華させることを目的としています。また3年次の『専門演習』（ゼミ）ではこれまで学んだ知識を活用し、「市の交流人口を増やす」などの地域振興策を実践し自身の研究水準を高め「九州心理学会」でその成果を発表しています。これにより心理学的な視点から課題を分析・解決し、その成果を社会に発信・還元する力の育成を目指しています。

心理学科のもう一つの特長は本学大学院臨床心理学専攻との連携です。療育医療センターや被災地での支援活動とともに、大学院進学ガイダンスや学内入試特別枠での受験制度など、進学希望の学部生が早くから大学院での学びの支援を得られる体制を設けています。この結果、例年多数の学部生が進学し、臨床心理士と公認心理師の両資格の取得を視野に、心の専門家としての一歩を踏み出しています。



写真2 心理学科の地域支援活動

子ども発達学科

私が所属している子ども発達学科は、学年学生定員120名、専任教員は18名で、そのうち心理学担当教員は赤間健一准教授（教育心理学）、毛利泰剛講師（臨床心理学）、筆者（発達心理学）の3名で、うち2名は臨床心理士です。

子ども発達学科は保育者・教員養成を主目的とした学科ですが、学びの中核は子ども理解に向けた『心理学』の学びと、広く子どもや子どもを取り巻く世界を捉える『子ども学』です。

中核の一方である『心理学』の学びは、「心理学概論」「発達心理学Ⅰ・Ⅱ」「子どもの発達と学習の心理学」「発達・教育相談の基礎」「発達・教育相談の方法と実践」「子ども理解の心理統計法」などにより、子どもの内面と行動を科学的に理解するとともに、発達支援の実践者としての学習経験を積み重ねる構成となっています。

また一方の『子ども学』の学びは、「子ども学概論」「子ども学フィールドワーク」「子ども学観察演習」「子ども学フィールド演習」「子ども学総合演習」であり、それらを踏まえ、子ども学の集大成となる「卒業研究」で4年間の学びを発表します（卒業論文等は学科行事“ミッションチャイルド”でポスター等発表します）。

本学科の特長である『心理学』と『子ども学』両面からの学びは、子どもや子育て理解に必要な人間理解を保障する組み立てとなっています。人間の生理的メカニズムや視覚の構造・機能について体験的に学び、子どもを取り巻く世界を多角的・多面的にとらえて多様な価値観を共有するための対話を重ねます。「みる」を重ねると「みる」が「診る」へ深化していきます。このように「み

る」ことや「話す」ことの経験を重ねた学生たちは、進路として、保育者・教師などの専門職、大学院進学その他、航空業界など一般企業を目指し就職する学生もいます。



写真3 子ども発達センター観察室

大学院人文科学研究科

本学には大学院3専攻（比較文化、臨床心理学、発達教育学）があります。臨床心理学専攻は心理学科、発達教育学専攻は子ども発達学科を基礎学科としています。それぞれの専攻には多様な学科出身の学生がいます。

発達教育学専攻

大学院発達教育学専攻は、教育学・心理学・特別支援教育学の3分野から、発達と教育の実践を支え開発していく学問として2015年に専攻開設しました。本邦初の修士号である修士（発達教育学）が取得できます。客員教授に内田伸子先生（お茶の水女子大学名誉教授：発達心理学、認知科学）を迎え、9名の専任教員で教育研究指導をしています。そして、学校心理士養成大学院として、多くの心理学科目を学んでいます。本専攻は、社会人や現職者の学び直しを開設趣旨に掲げています。ストレートマスターはもちろんのこと、保育士、幼稚園・保育教諭、小学校・中学校教諭、高等学校養護教諭、特別支援員、看護師、留学生その他、園長や主幹教諭など、所属している院生の経歴はさまざまです。所属している文化が異なるので、院生室はさながら異文化交流

となっています。

また、毎年開催している『発達教育学講演会』、大学院3専攻持ち回りで3年に1度開催している『国際交流講演会』は、2015年に専攻開設記念としてハーバード大学のタイチャー氏を招聘し『脳科学から子どもの虐待』を、2018年度は福井大学子どものこころ発達研究センター教授の友田明美氏と内田伸子客員教授の『子どもの虐待と脳科学』を開催しました。これらの学際的な研究を受け、さらに『発達教育学研究会』で、多様な分野の研究者・実践者から学ぶ機会を保障しています。

本学の資源を活かした連携

本学は、同一敷地内に幼稚園、幼稚園教員養成大学・大学院がある、全国でも珍しい私立大学の一つです。緑豊かなキャンパスの中には、大学の施設である子ども発達センター、幼稚園の施設には子育て支援施設「森のおうち」と4月には桜が満開になる「どんぐり山」があり、特に地域貢献として行っている子育て支援で学生・院生・教員が協働・連携しています。

子ども発達センターは、子ども発達学科と発達教育学専攻の学びのシンボルとなっている建物です。観察室、子育て支援室、相談室があり、幼稚園と共同している子育て支援では、同室2方向から撮影される映像を、隣接している観察室で操作し、大学や大学院の観察法等授業で学ぶことができます。相談室には箱庭があり、教育相談の授業では模擬相談の場所となります。このような本学の施設や資源を活かして、今後さらに連携等展開していくことを計画しています。ぜひ大学ホームページをご覧くださいませましたら幸いです。

バンクーバーでの邂逅

明治学院大学心理学部 准教授

野村信威 (のむら のぶたけ)

2017年4月から1年間カナダのバンクーバーで在外研究を行う貴重な機会を得ました。受け入れ先はランガラカレッジというコミュニティカレッジで、私の専門領域である高齢者の回想研究では有名なジェフリー・ウェブスター (Jeffrey Webster) 先生が籍を置いています。

在外研究ではカナダに住むお年寄りから直接英語で思い出話を伺い、日本の高齢者の回想の語りとの文化的差異を検討したいと考えました。これまで海外の文献で述べられていることと自分自身が高齢者の語りに触れて体験したことの間にあるズレのようなものを、直接英語で語られる回想に耳を傾けることで少しでも埋めたいと考えたのです。

慣れない異国の土地でフィールド研究を行うことには、日本にいる時には予想もしなかったような障害や苦勞がありました。ここでは紙幅の都合から割愛します。ウェブスター先生からの貴重なアドバイスや励ましのお陰もあり、結果として人種や民族的背景も多様な20名近いお年寄りに個人回想法による面接を行うことができました。その結果はいずれ論文にまとめて報告したいと考えています。

この取り組みを通じてさまざまな貴重な出会いを経験することができました。ここでは私が出会ったDさんという女性を紹介したいと思います。Dさんは前述した研究の参加者ではなく、私がバンクーバー滞在中にボランティアとして定期的に訪問していたナーシ

ングホームの住人でした。私が訪問していた相手は基本的に日系カナダ人の高齢者でしたが (日本から帰化した高齢者の中には認知機能が低下すると英語で話しかけられても返事をするのが難しくなることがあり、母国語話者による訪問ボランティアのニーズがあるのです)、彼女は以前はジャーナリズムの領域で活躍してきた研究者であり、施設の方が紹介してくれたのです。

Dさんはイギリス系カナダ人の90歳代の穏やかな物腰の女性で、一つひとつの言葉をとてもゆっくりと話す方でした。私は自分が日本から来た研究者で高齢者の回想を聞き取る研究に取り組んでいることを伝えて「思い出話を聞かせてほしい」と依頼すると、彼女は週に1回訪問して私と話をすることに同意してくれました。また彼女は自ら書き記した『あなたに話していないこと』というタイトルの自叙伝を私に貸してくれました。それ以降、その自叙伝を読み進めながら私は彼女の思い出話を聴かせてもらうために彼女を訪問しました。

あるときは彼女の少女時代の親友の住まいであり、現在では歴史的建築物として保存されている邸宅を本人の代わりに訪問し、その写真を撮影してプレゼントすると彼女はとても喜んでくれました。また若くして亡くなった彼女の妹について私が質問したときには、彼女はそれには答えずただにっこりと微笑みました。その時の悲しそうにも過去を懐かしむようにも



Profile—野村信威

同志社大学大学院文学研究科博士課程修了。博士 (心理学)。大阪人間科学大学助教、明治学院大学心理学部専任講師を経て現職。専門は生涯発達心理学、高齢者心理学、質的心理学。著書は『よくわかる高齢者心理学』(分担執筆、ミネルヴァ書房)、『質問紙調査と心理測定尺度』(分担執筆、サイエンス社) など。

見える彼女の笑顔は今でも忘れられません。

10月になり私の研究が本格的になると施設に頻繁に訪問することが難しくなり、私は訪問のキャンセルを依頼する連絡を何度か行いました。11月になり、ようやく訪問する時間を作れたのでその了解をもとめるメールを送ると、ほどなく彼女の息子さんからの返信を受け取りました。そして何でもない風邪をこじらせて数日前にDさんが亡くなったこと、本人の希望で葬儀は行わず、遺灰は山間部の小さな湖に散骨されたことを知りました。これまで研究を通して大勢のお年寄りの方とお会いしてきたとはいえ、この知らせはとても衝撃的で、私は彼女の訪問のキャンセルを重ねたことを後悔しました。Dさんの回想は途中までしか伺えませんでした。 (息子さんの計らいで) 彼女の自叙伝のPDFは今でも私の手元にあります。私はときどきその自叙伝を眺めて彼女が話してくれた思い出について思い巡らせます。



Profile—朱 映菡

2013年、同志社大学心理学部卒業。
2018年、同志社大学大学院心理学
研究科博士後期課程修了。同年より
現職。専門は精神生理学、感情心理
学。論文は「The initial emotional
output cannot be modified: The
premier expression (共著, *The North
American Journal of Psychology*)
など。

皆さんは「合宿」がお好きでしょうか？日本の大学では学部の新入生を対象とした「新歓合宿」、指導教員とゼミの所属学生の「ゼミ合宿」、大学院の新入生による「研究室合宿」など、いろいろな合宿が自主的に行われています。毎年楽しみにしている、という方も大勢いらっしゃるでしょう。私は来日した10年前にはじめて「合宿」に参加したのですが、実は、そのときは戸惑いました。

もちろん、同じ集団に所属するメンバーの親睦を深めるという合宿の目的は理解しています。しかしながら、合宿が行われる環境には私にとって大変なじみがたいことがありました。それは大浴場でのシャワーと大部屋に泊まることです。そもそも中国の学校過程に、合宿という習慣はほとんどありません。合宿をよく行う「部活」や、大浴場がないことも関係するかもしれません。所属先の行事とはいえ、どうしてほぼ初対面の人と互いの裸を見せなければならぬのだろうか？……と私は、よ

文化のなかにおける個別の存在

東京大学進化認知科学研究センター 特任研究員

朱 映菡 (しゅ えいかん)

く知らない人の隣に敷かれた布団の中で考えていました。

カルチャーショックという言葉があります。知らない文化の中へ入れれば誰でも違いに驚き、少なからず混乱するでしょう。私も「日本の文化にびっくりした、ついていけない」と言ってしまうまでです。

ただ、今もそうなのですが、私は人や習慣に対して感じた「違い」を文化に帰属する考え方に強い抵抗があります。そこでいろんな日本人に合宿について聞いてみたところ、単純に好きという人もいれば「合宿に参加すればみんなと一緒にやっていきけるような気がする」という意見を持つ人も、生まれつきの日本人で「苦手、できれば行きたくない」と感じている人もいました。日本人のすべてが「合宿大好き」というわけでもなく、合宿という習慣にそれぞれの気持ちを感じて参加していることになります。

私は博士課程を通じて感情表出について研究していました。よく知られているように、私たちはその場にふさわしくない感情をおぼえると、その場にふさわしい別の感情を表出してそれを隠します。しかし隠す直前の非常に短い時間に、隠そうとしないときと同じ微細な表情変化が起こることが分かり、私はこれを premier expression と名づけて脳活動との関連などから検討していました。私がこのような現象を研究したのも、環境や文化を超えて個人に普遍的な感情を明らかにしたかった

からかもしれません。

私たちは誰もが個人の意思と感情を持ち、個人が習慣や文化に対して抱く感情は本来個別のものですが、私たちがいずれかの社会に所属しなくてはならない以上、好き嫌いに関係なくその文化と接する必要があります。すると、本来は嫌いだったり、おかしいと感じる習慣にいやいや従うことや、自分にとって当然の習慣を相手に強要することが起きます。文化の存在の大きさから知らず知らずそうしてしまうのです。そこでは、「自分だって我慢しているのだから相手も我慢すべき」という理不尽な振る舞いさえ、当然のこととして起ります。そして自分本来の感情を抑制し、時として自分で認識できなくなってしまう。

文化や習慣は、社会を構築する上で不可欠です。しかし、一人ひとりが生きる社会が成り立つために文化が必要なのであって、文化を成立させるために一人ひとりが文化や習慣に抑制されては矛盾してしまいます。留学により所属文化を変更しても、自らの本質が変更するとは限りません。変更できないからギャップに苦しむし、本質を知るために留学するのですから。

それは他者を知る上でも同じことが言えるでしょう。文化の存在を無視したり否定するのではなく、どんな文化の中にも、文化が個人と別の存在であることを常に忘れず、目の前の人と接したいものです。そのために大切なのは、自分の感情や意志に主体的であることではないでしょうか。



このコーナーは新刊の心理学関連書籍を著者自らにご紹介いただくコーナーです。

ベーシック 発達心理学

齋藤慈子

本書は、子どもの発達に関する知識が必要とされる、保育士や幼稚園教諭、小学校教諭の卵である学生、つまり、心理学を専門とせず、発達心理学の実践的側面を必要とする人々を、主な対象として作られました。そのため、保育士養成課程、教職課程の要件を満たしつつ、平易な表現で必要な知識をわかりやすく伝える努力がなされています。

加えて本書には、発達心理学のもう一つの側面、基礎科学としてのおもしろさを最大限伝える工夫も施されています。執筆陣は、発

達心理学の第一線で研究を行っている気鋭の若手研究者たちです。彼らにコラムとして自身の研究を紹介してもらうことで、心理学を専攻する学生にとっても読みごたえのある内容となっています。最新の知見が盛り込まれ、各章におすすめの参考図書と引用文献リストも掲載されていますので、より専門的な学びにもつなげることができるでしょう。養成課程のテキストとしてだけでなく、発達心理学の入門書として、学生や親御さんなど、いろいろな方に読んでもらえればと思います。



共編 開一夫・齋藤慈子
発行 東京大学出版会
A5判 / 288頁
定価 本体2,400円＋税
発行年月 2018年1月

さいとう あつこ
上智大学総合人間科学部心理学科准教授。理化学研究所脳神経科学研究センター親和性社会行動研究チーム客員研究員。専門は発達心理学、比較認知科学。著書はほかに『心理学研究法4 発達』（分担執筆、誠信書房）、『日本のサル学のあした』（分担執筆、京都通信社）、『知のフィールドガイド 科学の最前線を歩く』（分担執筆、白水社）など。

フロンティア実験社会科学5 選好形成と意思決定

竹村和久

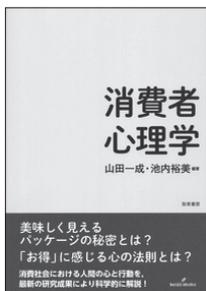
社会のなかでは、個人が様々な意思決定を行っている。個人の意思決定のメカニズムを明らかにすることは、心理学だけではなく、経済学、政治学などの社会科学にとって基本的な知見を提供でき、社会政策に取り組む場合にも示唆を得ることができる。本書は、人々の好き嫌いなどの個人の選好はどのように形成され、どのような過程で意思決定がなされ、社会で生かされるのかを、選好形成と意思決定についての理論（心理学、哲学、意思決定論、神経科学の諸理論）、方法論（数理モデル構

成、眼球運動分析、行動分析、心理計量分析、脳機能画像解析）、実証（観察、実験、調査）の観点から解説を行っている。本書の各章は、文科省の特定領域研究や基盤研究Aなどを通じて、選好形成と意思決定について10年以上にわたって共同研究をしてきた人々が担当しており、それらの研究の成果も紹介されている。分野は、実験心理学、社会心理学、行動計量学、神経科学、精神医学、都市社会工学などの多岐にわたっており方法論も異なっているが、本書のタイトルと同じ現象を取り扱っている。



監修 西條辰義
編 竹村和久
発行 勁草書房
A5判 / 240頁
定価 本体3,300円＋税
発行年月 2018年8月

たけむら かずひさ
早稲田大学文学学術院教授。早稲田大学意思決定研究所所長。専門は社会心理学、経済心理学、行動意思決定論。著書はほかに *Behavioral decision theory: Psychological and mathematical descriptions of human choice behavior* (Springer)、『経済心理学：行動経済学の心理的基礎』（培風館）、『意思決定の処方』（共著、朝倉書店）など。



消費者心理学

山田一成・池内裕美

共編 山田一成・池内裕美

発行 勁草書房

A5判 / 240頁

定価 本体2,700円+税

発行年月 2018年10月

やまだ かずなり

東洋大学社会学部教授。専門は社会心理学。著書はほかに『聞き方の技術』（日本経済新聞出版社）、『よくわかる社会心理学』（共編、ミネルヴァ書房）など。

いけうち ひろみ

関西大学社会学部教授。専門は社会心理学。著書はほかに『暮らしの中の社会心理学』（分担執筆、ナカニシヤ出版）、『わたしから社会へ広がる心理学』（分担執筆、北樹出版）など。

消費者心理学と言うとセールストークやマーケティングリサーチを連想される方も多いと思います。しかし、商業や応用という言葉で括る前に、消費者である自分自身の心と行動が、ホモ・エコノミカスとどのように異なっているか、考えてみてください。本書ではそうした問いへの答えを心理学という視点から用意しました。なぜ欲しくなるのか。なぜその商品でないとダメなのか。消費者行動論や行動経済学を学んでいる方々にも、いつもと違う視点から読んでいただければと思います。（山田一成）

消費者としての活動はあまりに日常的すぎて、意識することは少ないかもしれません。しかし、手元にあるその商品をなぜ買ったのか、その時の状況や心の状態を少し思い出してください。店頭で勧められたから？ 期間限定だったから？ あるいは何となく買いたい気分になったから？ 本書では、こうした消費をめぐる身近な諸問題に焦点を当て、国内外の最新の研究成果を交えて解説しています。知識を得るほどに、日常の買い物が楽しくなります！ ぜひ当事者としてお読みください。（池内裕美）



災害リスクの心理学

ダチョウのパラドックス

中谷内一也

訳 中谷内一也

発行 丸善出版

四六判 / 200頁

定価 本体2,800円+税

発行年月 2018年8月

なかやち かずや

同志社大学心理学部教授。専門は社会心理学、リスク心理学。著書はほかに『リスク：不確実性の中での意思決定』（訳、丸善出版）、『リスクの社会心理学』（共著、有斐閣）、『安全。でも、安心できない・・・』（ちくま新書）、『リスクのモノサシ』（NHKブックス）、『信頼学の教室』（講談社現代新書）、『ゼロリスク評価の心理学』（ナカニシヤ出版）など。

人の判断は時として歪み、本人や周囲に不利益をもたらす。その最たるものが災害に関する意思決定であり、私たちは災害リスクについて判断を誤り、不十分な準備しかせず、緊急時にも自らの首を絞めてしまう。そこで、判断バイアスを克服し、合理的な意思決定によって災害を乗り越えることが重要であり……、と普通なら続くところだが本書は違っている。原著者たちの主張は、ダチョウがどうしたって飛べないように、人間もどうしたって判断バイアスからは自由になれない。ならば、飛べないダチョウが

他の能力によって逃げの名人になれたように、われわれも判断バイアスを前提とし、むしろそれを利用するマネジメントによって災害対応の名人になれるはず、というものである。読んでいて「ダメだこりゃ」とつぶやいてしまう事例が満載だが、そういったダメ判断に向かって後知恵で無益な批判を展開するのではなく、生産的な対策を得ようとするところが本書の特色である。本書の基盤にあるのは二重過程理論であり、同理論の防災・減災に向けた斬新なアプローチが示されている。

認定心理士の会から

認定心理士の社会的地位向上を目指して

「認定心理士資格は特になんの役にもたたない」とよく聞きます。アンケートでも認定心理士資格を得たことのメリットは「特になかった(40.3%)」が多数でした(認定心理士報告書, 2015)。認定心理士の社会的地位や価値を高めていくのは日本心理学会の責務ではありますが、一方でライセンスホルダーの方々の活躍によるところも大きいと考えております。ここ最近のITの発達により個人が連携をとり、新しいコミュニティや研究のプロジェクトを立てることも可能となってきました。

認定心理士の会を運営する運営委員会は、皆様に認定心理士としてのさらなる社会への貢献とアカデミアへの参加を期待して、今年度2019年は、より積極的なアプローチで認定心理士の社会的地位の向上のサポートをしていきたいと企画・準備しております。認定心理士のホームページで最新のスケジュールをご確認ください

い。会場まで足を運ばない方にはインターネットを使ったオンラインでご参加ができるイベントもございます。「Net de 交流! 認定心理士」では国内はもとより、海外にお住まいの方とも知り合えることができます。また、オンライン上のコミュニケーションの場として、フェイスブックに認定心理士の方限定のコミュニティグループもご用意しました。<https://www.facebook.com/groups/1218354891640905>



是非ともこれらのイベント、システムを大いにご活用ください。認定心理士の会の主役は皆様です。運営委員会からの皆様へのサポートも含めて、一緒に考えてまいりましょう。皆様のご意見をお待ちしております。

(認定心理士の会運営委員会委員 池田琴世)

若手の会から

これからの若手のために 若手の会ができることは何か?

日本心理学会第82回大会が終了して早数ヶ月ですが、日本心理学会によって大会についてのご意見・ご感想をお伺いするアンケートが実施されました。若手の会の企画についても、ご参加の多くの方からご意見をいただき、ありがとうございました。

若手の会の企画として、研究費の獲得、留学、就職というテーマで現在活躍中の若手から経験を語ってもらうという趣旨のシンポジウムを行いました。この企画については、現役の学生と思われる方々から、今後の進路に活かせようというポジティブなご意見をお寄せいただきました。その一方で、「『成功』した人の方略そのものは多くの学生が既に知っているのではないか」というご意見をいただき、企画者側として非常に考えさせられるものがありました。

こういったご意見をうけて、まず、若手が現在進行系で直面している悩み、課題を適切に拾い上げることが若手の会の活動の中では重要になると感じました。先輩のキャリアの話聞くことで参考になることは多く存在しますが、キャリアが進んでいくとより若いキャリアの段階にある人がどういったことに悩んでいるか認識しづらくなる、ということも若手の会を運営する立場としては自覚する必要があると思います。そして、いま現在「成功」とされるようなキャリア形成のあり方のみを強調せず、多様なあり方を広く共有することの必要性も同時に感じました。

自らもキャリア形成の途上にある若手の立場で、手探りの活動が続きますが、これからの若手のために何ができるかを日々考えながら会を運営したいと思います。

(若手の会代表幹事 前田駿太・三浦佳代子)



赴任先で出会った新しい楽しみ



鳥取大学地域学部 准教授

田中大介 (たなか だいすけ)

2006年、東京大学大学院総合文化研究科博士課程単位取得退学。博士(学術)。JST社会技術研究開発センター研究員などを経て現職。専門は認知心理学、発達心理学。著書は『単純接触効果研究の最前線』(分担執筆, 北大路書房), 『保育の心理学 I』(分担執筆, 大学図書出版) など。

私は10年ほど前に鳥取大学へ赴任しました。キャンパスから車で5分も走れば美しい日本海の海岸にでられます。「この海に入りたい」という思いからサーフィンを始めました。今回、サーフィンについて語ってよいという機会をいただきましたので、心理学徒目線からサーフィンを語ります。

日常

サーフィンとは、沖から岸へと打ち寄せる波にサーフボードという板を使って乗るスポーツです。サーフィンの最適時は早朝。陸から海に向かう陸風は夜にふきますが、この陸風は波の面を整えるのです。陸風が海風にかわるまでの時間帯が重要なのです。そのため、夜明けとともに海に入り、ひとしきり練習したら家に帰って朝食を済ませて出勤、というのが理想的な生活スタイル。これが実現できるのが「海至近物件・鳥取大学」の良さです。ただ、残念なことに一般的なサーフィン・シーズンである夏、日本海にはあまり波は立ちません。日本海のメインは「西高東低」の気圧配置になる冬。サーフィンはウィンタースポーツなのです。冬は日の出が遅いので出勤前にはできません。

学習科学の題材として

サーフィンは上達の難しいスポーツとして知られています。反復練習が難しいのです。「バランスをとって斜面を滑る」という点はスキーやスノーボードに近いのですが、海にはリフトがありません。時には流れに流されつつ、波

が割れるところまで泳いでいくのが一苦勞。そして、たとえ先に待っていても、後から来た上級者に波をとられてしまえば、延々と浮いているのみ。それでも稀には波に乗れることも。そのときの感動たるや、他に例えようのないフロー体験です。そんな超低比率の部分強化スケジュールによって、私はやみつきになりました。海外ではセラピーとして利用されることもあるようです。確かに「今、この波」に集中することでストレス解消になっています。

よく、「二度と同じ波は来ない」と言われます。波の向きや周期、風向や潮など、刻々と変化する状況に対し柔軟に対応しなければなりません。多くのパラメータを同時処理して最適な行動をとる……サーフィンは潜在学習課題に他なりません。このテーマで博士論文を書いた私にとってサーフィンは実践研究でもあるのです。

朝練で顔を合わせる先輩方から技術的なアドバイスをもらうことも多いのですが、それを通じて、身体的な動作をどんな言葉に置き換えるか、に興味をもっています。例えば「テイクオフ」という、波から力をもらって立ち上がる基本的な動作に関しても、初心者と中級者では「コツ」が異なる、ということを知りました。身体が動くようになってはじめて理解できるようになる言葉もある、というのが面白いです。上達するにつれて自分からどんな言語表現がでてくるのか、楽しみです。

文化としてのサーフィン

「サーフィンを始めると人生が変わる」と言われます。サーフィンはスポーツという側面だけではなく、文化としての側面もあるのです。愛好者同士のコミュニティもありますし、人間のコントロールをこえた「波」という自然の力を利用した遊びなので、必然的に自然に対する畏敬の念を抱き、そこから独特の自然観や世界観を構築するのでしょうか。「まち」と「自然」の境界としての海岸に立てば、幾多の漂着物や海岸浸食などを目の当たりにすることで、おのずと環境問題に対する意識も芽生えます。APA(アメリカ心理学会)は2019年のトレンドとして「気候変動に関する心理学者の貢献」を挙げていますが、私も一心理学徒として気候変動や環境問題に関して問題提起したいです。

さて私は鳥取大学サーフィン部顧問なる肩書きもいただいています。豊かな自然の恵みを楽しみつつ、きちんと講義にも出席できる環境は希有です。サーフィンと勉強を両立させたい高校生のみならず、ぜひ鳥取大学を進学先候補としてご検討ください。



3年前、鳥取大学杯での一コマ。
Photo by Kota Yoshida

意思ではなく行動を変える

株式会社 MillReef コンサルタント

八重樫勇介 (やえがし ゆうすけ)

私は企業向けに応用行動分析学(以下ABA)に基づいた組織・人事コンサルティングを行っています。この学問の特徴は、行動の原因を個人の内面に求めないことです。例えば、「報連相」(報告・連絡・相談)をしない部下を見て「やる気がないからしない」と考えるのはABA的ではありません。このように、人の内面を原因にしてしまう最大の問題は問題解決に繋がらないことです。先の例で、やる気の無さを原因に、「やる気を上げろ」と言っても具体的に何をすれば良いのか全くわかりません。もっと言えば、やる気の変化したかどうかはわかりませんが、仮に本当にやる気という内面の変化があったとしても、報連相をする行動に変化がなければ意味がありません。

対して、ABAでは行動する前はどのような状態なのか、行動した後は何が変化したのかに着目します。ビジネス現場でよくある例を一つだと、せっき部下が目標時間より早く仕事を終わらせたのに、上司から「じゃあ次はこの仕事お願いね」と追加の仕事が与えられるということがあります。これは、部下が報告するという行動をした直後に追加の仕事発生という環境の変化が起きています。これでは、多くの社員の報告行動が減ってしまうことが考えられます。そうではなく、望ましい行動や定着させたい行動後には本人に

とって望ましい環境変化を起こす必要があります。このように、本人の意思ややる気ではなく、その人を取り巻く環境に目を向け、行動の前後を分析し、改善策を考えていきます。

行動データに基づく改善策

先程身につけさせたい行動には、本人にとって望ましい環境変化が必要だと述べました。ただし何が望ましい環境変化で、何が望ましくない環境変化なのかは注意が必要です。この判断は実際に適切な行動が増えたかどうかという行動事実に基づきます。いくら適切な行動後に望みそうな環境変化(「よくやってくれたね、ありがとう」など)を起こしても、実際に行動が増えなければ、その人にとって望ましくなかったということです。そして、この判断を行うには行動データが必要になります。行動データを取っておくことで、改善策導入前と比べて、その行動が増えているのかどうかわかります。さらに、わかることで増やしたい行動に対する環境変化が効果的であったのか検証ができます。もし行動データがなければ、個人の主観や経験則に頼って改善策の検討をすることになりま

Profile—八重樫勇介

2018年、北海道医療大学心理科学部臨床心理学科卒業。同年に株式会社 MillReef 入社。組織・人事コンサルタントとして、応用行動分析学の知見を基に、研修やコンサルテーションを行っている。



ビジネスと実践研究の両立のため、日々奮闘しています

す。これでは、本当は効果がない改善策を効果があると思って導入し続けてしまったり、本当は効果がある改善策を効果がないと思ってやめてしまうことが多々起きてしまいます。これはビジネス的にもかなりの損失に繋がります。このような間違いを防ぐためにも行動データに基づく改善策の検討は有効だと思います。

見える行動・測れる向上

今回紹介した、行動データに基づき改善策を検討し、意思ややる気ではなく、具体的な行動変化に着目するアプローチは非常に役立つと思います。私の所属している会社も、ABAに習い「見える行動・測れる向上」をモットーにしています。これからもコンサルタントとして、ABAを軸に「問題の原因は人の内面ではなく、環境変化にある」——このような考えで企業のサポートをしていきたいです。

心理学は薬膳スクール運営のスパイス

ナチュラル薬膳生活カレッジ柏本校サロン オーナー講師

須崎桂子 (すぎき けいこ)

10年ほど前にストレスの多い会社勤めを辞めて、夢だった薬膳スクールを個人事業で立ち上げました。心理学は開業後に学び始め、認定資格コースのカリキュラム作りや、認定資格取得者の継続学習システム構築の際に、心理学をスパイスのように活かしています。

薬膳学は中国伝統医学（中医学）の理論を活かした食事療法の学問分野です。そのため生徒さん達は、本人や家族が、心や身体に健康の不安を抱えている場合が多いです。中医学理論では、心の不調が身体の病気すなわち心身症の遠因になりやすいことが知られています。しかし次第に、伝統医学だけで心の不調を分析して、根本的な解決を目指すのに限界を感じ始めました。そこで心と身体の関係を実験的に知ろうと、心理学や現代生理学も学んで、心理学については自営業の傍ら6年かけて認定心理士を取得しました。

薬膳コースカリキュラム作りにおいては、心理学のうちセラエのストレス学説などが参考になりました。そのおかげで、中医学だけでなく心理学と現代生理学の知見も交え、「心身の生理」→「心身の病理とその原因」→「薬膳で出来る範囲の病気予防と治療」の流れでカリキュラムを体系化出来ました。平常心がストレッサーで乱れると、自律神経が失調しやすいこと。その影響が免疫系や内分泌

系まで及ぶと、臓腑の本来の機能が低下すること。その結果、身体の調子が悪くなるという心身症のメカニズムが分かったからです。そこで、不眠症や過敏性腸症候群やアトピー性皮膚炎のような心因性とみられる不調を癒す薬膳レシピを指導する課程では、心理学にも触れながら薬膳調理のレッスンを行っています。

また認定心理士となった現在は、マズローの欲求段階説やアルダーファーのERG理論といった50年近く前の心理学研究を、薬膳スクールにおける認定資格取得者のための継続学習システム構築に役立てています。ここ数年、薬膳資格を取得した後も学習意欲が衰えず、ブラッシュアップ研修でさらに高度な知識や技能を学び続ける生徒さん達が増えています。その理由をマズローの欲求段階説で考えました。欲求は最高次の自己実現に達すると、欲求に対する充足感が出てもその強さや重要度は減少せず、逆に増加するとされています。開校以来、薬膳カリキュラムを改善し続けてきた結果、や



薬膳スイーツレッスン中の一コマ（右から2人目が筆者）

Profile—須崎桂子

オレゴン大学アジア研究学部（中国研究）卒業。外資系企業での営業職等を経て、2001年、シカゴ大学大学院人文科学科修了。2007年に中国薬膳研究会認定国際薬膳師を、2016年に認定心理士を取得。

る気のある生徒さん達がさらなる高みを目指して学ぶようになったのでしょ。そして、マズローの説を発展させたERG理論では、欲求が必ずしも段階を踏むわけではなく、初めから自己実現欲求が起こる可能性があるとしています。そこで、新入生達が、成長欲求が高い先輩の認定資格者から薬膳を学ぶレッスンの機会を設けました。すると、薬膳を教えられるようになった先輩から刺激を受けた後輩の中には、自分もそうなりたいという強い願望や学習意欲が生まれます。やさしい薬膳料理クラスで満足していた生徒さんが、先輩達の活躍を見て認定資格コースに編入したケースもありました。

このように心理学は薬膳の仕事における隠し味になっています。これからも心理学を活かし工夫を重ねながら、健康に役立つ薬膳レッスンを通じて社会貢献を続けたいと思います。

資格認定委員会より

1. 認定心理士について

平成30年度第5回（通算第173回）認定心理士資格認定委員会が平成30年12月15日に開催され、11月13日までに受け付けた698件について審査し、667件を合格、18件を保留、13件を不合格としました。また、第4回までの保留等について追加資料の整った15件を再審査し、14件を合格、1件を不合格としました。この結果を受け12月31日時点での平成30年度の累計で、初回審査件数は3,252件、総審査数は3,312件、合格件数は3,215件、資格取得者は2,581名となりました。その結果、資格取得者は累計58,858名となりました。今後の認定委員会の開催予定日は平成31年2月16日（土）、平成31年4月20日（土）です。

2. 認定心理士（心理調査）について

同委員会では、第4回までの保留等について追加資料の整った1件

について再審査し合格としました。この結果を受け、12月31日の時点での平成30年度の累計で、初回審査件数は56件、総審査数は64件、合格件数は54件、資格取得者は50名となりました。その結果、資格取得者は累計101名となりました。

また、同委員会では、12月5日までに大学から申請のあったカリキュラム認定10件について審査しました。

3. 認定心理士の会について

認定心理士の会は、平成30年12月31日時点で会員数は3,941名になりました。本会は、平成30年度には、前の号でご報告した10月30日までに合計11件のイベントを開催してきましたが、それ以降平成31年1月31日までに、「オンラインによるコミュニティの形成」（第5回 Net de 交流！ 認定心理士、11月2日）、「『感動空間』を創る発想力の秘密」「未来へのデザインー芸術・医療・福祉ー」（東北支部会公開講演・シンポジウム、11月14日、東北福祉大学けやきホール）、「意識と行動のサイ

エンスー心理学は人間をどこまで理解できるか？〜」（関東支部会公開シンポジウム、11月18日、上田駅前ビル・パレオ会議室）、「ポジティブなこころの科学ーポジティブ心理学の展開ー」「顔認知の諸相」（東北支部会公開講演・シンポジウム、11月23日、岩手大学学生センター大教室）、「人と人との関わり心理学」（北陸支部会講演会in石川、12月8日、ITビジネスプラザ武蔵研修室）、「学習理論を実生活で考える」（第6回 Net de 交流！ 認定心理士、1月25日）が開催されました。今後の予定等については、日本心理学会のホームページの「大会・行事案内」のなかの「認定心理士の会 イベント」をご覧ください。

4. 「シチズン・サイコロジスト 奨励賞」について

今回が初めてとなる同賞には、1月9日の締め切りまでに17件のご応募、ご推薦がありました。現在、審査を進めているところです。

（資格担当常務理事・日本大学教授 岡隆）

謝辞 日本心理学会名誉会員、東京大学名誉教授の肥田野直先生から、心理学ワールド編集委員会宛に、心理学史/心理学論18/19合併号（2018）に掲載された論文「米国教育使節団の報告書と我が国の国語・国字改革ー心理学者の関わりー」抜刷を送付いただきました。戦後の国語教育に心理学者が大きな役割を果たしたことを示した論文であり、その背景には日本心理学会という心理学者の連携組織があったことを述べられています。心理学会の社会的役割に改めて気づかされた内容であり、送付に深く感謝いたします。（心理学ワールド編集委員長・川口潤）

編集後記

保育の世界では、保育者の資質の向上や保育内容の充実が強く求められるようになってきています。こうした社会情勢の変化や保育所保育指針の改定を受けて、この4月から新しい保育士養成課程が実施されます。より専門性の高い保育者の養成に向けて心理学に期待される役割がますます大きくなる中、改めて保育と心理学の関係を考えたいと思ったのが特集を企画したきっかけです。原稿をお寄せくださった先生方に感謝いたします。（旦 直子）

編集委員（五十音順）

- 編集委員長 川口 潤 名古屋大学
- 副委員長 大久保街亜 専修大学
- 委員 漆原宏次 北海道医療大学
- 大江朋子 帝京大学
- 金井嘉宏 東北学院大学
- 河原純一郎 北海道大学
- 北崎充晃 豊橋技術科学大学
- 後藤和宏 相模女子大学
- 清水由紀 埼玉大学
- 下津咲絵 京都女子大学
- 旦 直子 帝京科学大学
- 手塚洋介 大阪体育大学
- 担当常務理事 宮谷 真人 広島大学

心理学ワールド [85号] 2019年4月15日発行 年4回発行（1月、4月、7月、10月）

発行人ー横田正夫
編集・発行ー公益社団法人 日本心理学会 〒113-0033 東京都文京区本郷5-23-13 田村ビル TEL 03-3814-3953
表紙デザインー虎尾 隆 印刷・製本ー新日本印刷
制作ー（株）新曜社